

# パラワン島調査報告 [第 1 号]

REPORTS OF THE EXPEDITION

TO PALAWAN ISLAND. [PART 1 ]

— Results of the Ethnological survey to Batak tribe  
in Palawan, Philippines in 1966. —

横浜市立大学探検部

YOKOHAMA CITY UNIVERSITY  
SCIENTIFIC EXPEDITION SOCIETY.

YOKOHAMA JAPAN.

Sept 1967.

## はじめに

フィリピン共和国の西部ルソン島とボルネオとの間に位置する南北450 Km、幅は1番広いところで50 Kmというパラワン島はフィリピン群島内第4位の大島である。面積1,790 km<sup>2</sup> 人口約15万人であり南部に回教徒のモロ族、中部にタグバヌア族、パラワノス、中北部にバタク族、北部にビサヤ族が住み人種的にも、文化的にも著しく多彩である。我々が調査対象としたバタク族はネグリートに属すると言われ、その身体的特徴は、皮膚は黒褐色で、背の丈は平均150 cm前後で、髪はちぢれており、頭は丸い。山中で原始狩猟採集及び焼畑農業をおこなっている。都市部と離れている事はもちろんだが、そのおとなしい性質から彼らは新しい文化の影響をあまりうけず、文化的社会的に孤立している状態である。彼等はパラワン島中東部、パラワン州の州都、プエルト・プリンセサから北東に60 Kmないし90 Kmはなれた所に住んでおり、海岸から3~10 Km山中に入ったところに畑をつくっている。

1966年8月に約3週間、私たち横浜市立大学第二次パラワン島調査隊五名はこのバタク族を中心として、民族調査をおこない、同時に彼等の生活の場における生物相についても調査をおこなった。私達はこの調査を通して彼等の生活や文化や社会組織等を明らかにし、資料として提供すると共に、彼等の将来の問題として急激に変化しつつある環境に対していかに効果的に適応してゆけるかという問題を考察することを目的とした。日本ではあまり考えられないことであるが、フィリピンでは約80種以上の異った言葉を話す、文化的、宗教的、社会的に異った民族が3千もの島に住んでおり、相互間の交流も少なく、バタ族に関して言えば、彼等の名前も正確な人口もつかめておらず、もちろん何ら教育もなされておらず、税金を払わないことはも



とより国有林の中で政府の保護を受け、焼畑を行っているような状態なのである。いかにしてこうした相違を克服し、国家としての統一性を保っていくかというのは、フィリピン共和国にとっては大きな問題の一つとなっている。

現在、フィリピン政府では国立博物館を中心として各民族の社会調査等がおこなわれつつあるが、数も少なく、最も原始的なバタク族に関しては、こうした問題に答えるのに十分な調査はなされていない。

私たちが又言葉の違い、専門的調査の訓練不足、短い調査期間等から十分満足できる調査をすることが出来なかつたことは残念だが本調査が更に多くの人々によつて続けられ、発展していくことを期待したい。私達はこの調査がフィリピン共和国の国家建設にいささかなりとも貢献し、平和で友好的なバタク族の今後のために役立つことを願つて止まない。

微力な学生の集まりであるこの調査隊がこれだけの成果を納めることができましたのも、学内においては 松倉学長をはじめとする諸先生方、三輪学生課長、学友等々、学外におきましては宮代後援会長、宮代進交会会長、宇野進交会事務局長、都立大学の鈴木二郎先生、村竹精一先生、菊地靖先生、立教大学の馬淵東一先生、民俗学者の三好朋十氏等々、枚挙に限りない程多くの方々の御好意と御指導によるものであり、ここに深く感謝の意を表します。

昭和42年3月

# 目 次

序

目 次

行 動 日 程

隊 員 名 簿

I	バラワン島の概略 (合田)	1
II	バタク族の概観 ( " )	2
III	バタク族の人口分布 ( " )	4
IV	自然景観 (出羽)	12
V	物質的文化 (会田)	14
(A)	収入と生活程度 ( " )	14
(B)	衣 類 ( " )	15
(C)	装 身 具 ( " )	15
(D)	食 生 活 (鈴木)	16
(E)	栽 培 植 物 ( " )	17
(F)	焼 畑 ( " )	33
(G)	衛 生 ( " )	34
(H)	家 屋 (井埜)	35
VI	精神的文化 (合田)	42
(A)	家族組織 ( " )	42
(B)	社会組織 ( " )	45
(C)	通過儀礼 ( " )	48
(D)	宗教及び信仰 (安藤)	50
(E)	音 楽 ( " )	52
VII	採集民具目録	
VIII	バラワン島北東部にあるバタク族部落におけるネズミ (出羽)	63
IX	文献目録	71



## 第二パラワン島調査隊行動日程

### S 4 1.4.1 1 第二次パラワン島調査隊結成

- 4.1 5 第二次パラワン島調査隊、部会で正式承認さる
  - 4.1 8 隊員一部変更、計画書完成
  - 4.2 2 第1回シンポジウム
  - 5. 7 第2回シンポジウム
  - 5.1 4 第3回シンポジウム
  - 5.1 5 計画書改正版完成
  - 5.2 7 Pass Port 申請完了
  - 6.1 1 第4回シンポジウム
  - 6.1 8 第5回シンポジウム
  - 6.2 5 探検部、探査会合同計画説明会
  - 6.3 0 ビザの申請
  - 7.1 2 Invitation Letter がくる。(Hory Trinity Collage  
より)
  - 7.1 5 医療薬品完備
  - 7.1 6 装 備 点 検
  - 7.1 9 荷 造 り
  - 7.2 1 横 浜 出 発
  - 7.2 5 Hong Kong 着
  - 7.2 9 Manila 着
  - 7.3 1 Manila Zoo の見学
  - 8. 1 F・E・J 訪門
  - 8. 2 U・S・T 訪門
  - 8. 5 Puerto Princessa 着
- ロータリークラブで歓迎パーティー

S 4 1.8. 6 偵察隊の派遣

Elementary School, Holy Trinity Collage の訪問

8. 8 Elementary school で資料調査

8. 9 Puerto Princesa → San Rafael 着

通訳の雇用

8.10 San Rafael → Tagnaya

8.12 Tagnaya → San Rafael

8.14 村長より晩さん会に招待さる

8.15 San Rafael → Sumurod

8.17 Sumurod → San Rafael

8.19 San Rafael → Lipso

8.23 Lipso → San Rafael

8.24 San Rafael → Tagnaya ( 4人移動、1人San Rafael

にのこる )

8.25 Tagnaya → San Rafael ( 合流 )

8.27 San Rafal → Calacuasan ( 3人移動 )

8.28 Calacuasan → San Rafael ( 合流 )

8.29 San Rafal → Puerto Princesa

8.31 Elementary school

Holy Trinity Collage で送別会

9. 1 Puerto Princesa → Manilla

9. 3 Sienna Collage 訪問

9. 5 Manilla 発

9. 7 Hong Kong 着

9.11 神戸港着 → 羽田空港

9.12 NHK スタジオ 102、に 出る

帰 校。



## 隊員名簿

合田	瀧	隊長（商学部 3 年）
鈴木	光	副隊長、庶務（文理学部 3 年）
出羽	寛	装 備（文理学部 3 年）
井 埜 邦	明	渉外、会計（文理学部 2 年）
安 藤	嵩	技術、食糧（商学部 2 年）

## I バラワン島の概略

バラワン島はフィリピン共和国西南部、北緯10度、東経118度付近に位置し、長さ450km巾は最広部で50km、最狭部で10kmあり、東北から南西にのびる細長い島である。面積は1179km<sup>2</sup>で、そのほとんどが森林となっている。地下資源には、水銀、マンガン、珪砂、石英、クローム鉄鉱、鉄、などが発見されており、また山地には豊富な木材があるが、いづれも開発の歴史は浅く、今後に期待されている。山地が多く、8つの主要ピークがある。北からIrian(2169f) Stripepeak(4860f) Cleopatranedle(5223f) Stavoly(3930f) Victoriapik(5499f) Ganturg(5860f) Mantalingajan(6839f) Escarpado plak(3471f)、である。

気候は、1月から4月が乾期、5月から8月が雨期、9月から12月が間期(雨期・乾期の区別のできない期間)となっているが、島の東部と西部で多少異なり、西部ではこの雨期乾期の区別が明瞭であるのに対し、東部では、両者の区別が少なく、年間を通じて間期の様な状態である。気温は雨期にはひくく、乾期には高くなるが、大差はなく、年平均気温は30℃位である。

南部は18世紀までボルネオのサルタンの支配下にあった。また南部にはモロ族というイスラム教徒がおり、近海を荒しまわっている。スペインは18世紀に、このモロ海賊の横行を押える為にタイタイに兵舎を設けたが、無力のまま終り、モロとの戦いはそれ以後も長くつづいた。政府の奨励にもかかわらず、ルソン島やビサヤ諸島に住む人々はモロ族を恐れて入植しようとしなかった。軍政下におかれていたバラワン島が州に編入されたのは1902年で、現在同島には南部にモロ族がおり、回教徒としてス



ル諸島を中心に活躍している海洋民族である。吹き矢をよくする。

北部にはピサヤ族がいる。ピサヤ諸島に住む海洋民族である。キリスト教を信仰する内地一帯はタグバヌア族が住み、特に中部には多く、原マレー族に属し、人口は昭和17年現在で2万人だった。中央北寄りの山地にはバタク族がいる。ネグリートに属するといわれ、黒人矮小民族である。今なお原始採集、狩猟、焼畑農業を行っており、バタク語、コヨノ語を話す。

バラワン島の中心は州都のプエルト・プリンセサで、同島の中央部東海岸に位置する。島の行政、商業、交通、文化の中心地であるが華僑の商店が多く、タガログ語、英語が共通語となっている。人口約3万で、港、空港、大学、高校、病院、気象観測所、ロータリークラブなどがあり、水道と電気は中心部にだけある。プエルト・プリンセサに続く町として北部のドキナート、4阡4百人、タイタイ、5阡人、南部のブルクス・ポイント、2阡人などがある。

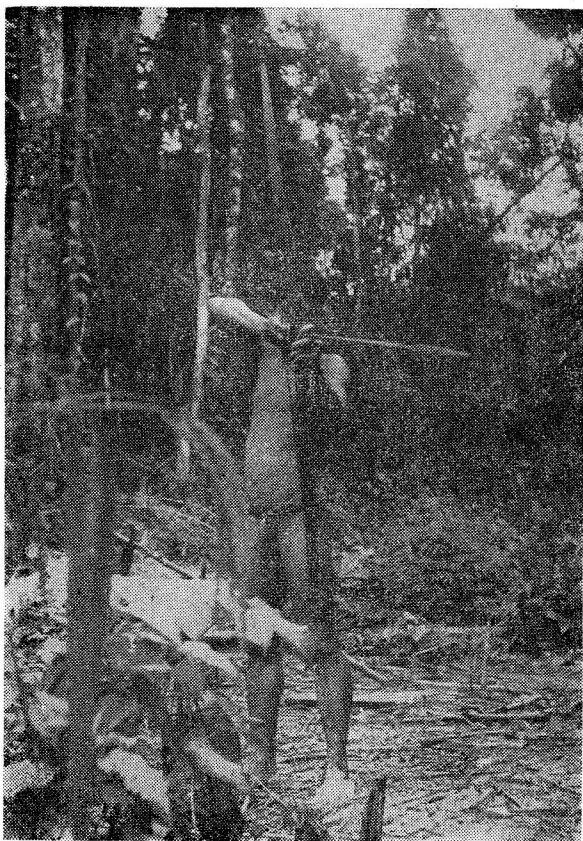
## Ⅱ バタク族の概観

バタク族は現存する東南アジア最古の民族であるネグリートに属すると言われる。身長は150cm前後であり、色は浅黒く、毛髪はちぢれていて、頭は丸い。男はG・ストリングスという、木の皮でつくったふんどし様のものをつけ、女は腰布をまとうだけである。

彼等は山中に竹で簡単な家をつくり、雨期には焼畑で稲作をし、稲の出来ないときは竹製の弓やワナを用いてイノシシ、サル、ヘビ、オオトカゲ、鳥類などをとったり、野生の芋類や果物などをとったりして、全くの原始狩猟採集生活を営んでいる。その社会的文化的孤立は我々の相像もつかぬ程であった。しかし性質はいたっておとなしく、素朴で、純真であり、むしろ臆病ともいえよう。陽気な性格を有する民族で、音楽を非常に好んだ

が、その調べはいづれも  
単調なもので、そこにも  
彼らの素朴さが伺えたよ  
うに思う。

現在、フィリピン政府  
の政策としてこれら未開  
民族の順応化がなされて  
おり、その第一歩として  
キリスト教の布教がなさ  
れている。バタク族のと  
ころにもその波が及び、  
そのために彼等はそれを  
避けて、又同時に他民族  
との接触をきらって、一  
層奥地へとはいっていく  
傾向があるように思われ  
た。



「獲物を狙う若者」

(Tagnaya 部落)



### Ⅲ バタク族の人口分布

#### A 人口分布の概略

次のリストは南から北へ順次あげたものである。距離はプエルト・プリ  
ンセサを起点としている。州の道路は62 kmでビンドヤンのそばで終って  
いる。

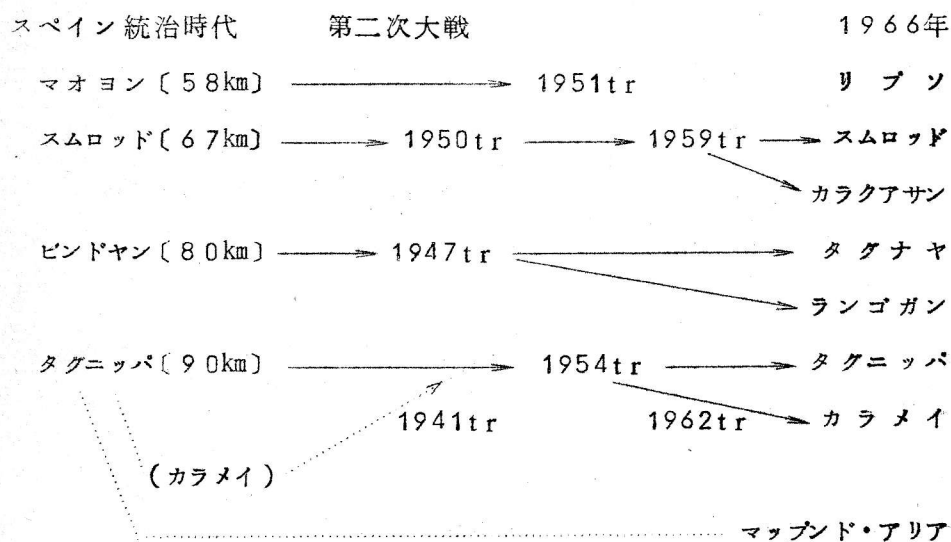
部 落 名	位 置	家族数	人口
1. リ プ ソ	マオヨンより3 km 〔 5 6 km 〕	17	52
2. ス ム ロ ッ ド	サン・ラファエロ より2 km〔 6 7 km 〕	11	33
3. カ ラ ク ア サ ン	タナバクより3 km 〔 7 0 km 〕	11	35
4. タ グ ナ ヤ	タラバナナより 3 km 〔 7 3 km 〕	7	(22)
5. ラ ン ゴ ザ ン	B.O. より上流 7 km 〔 8 6 km 〕	27	93
6. タ グ ニ ッ パ	B.O. より上流 2 km 〔 9 0 km 〕	12	(36)
7. カ ラ メ イ	B.O. より上流 6 km	11	(34)
8. マ ッ プ ン ド ・ ア リ ア	リサールとカルカ ンポの中間に位置する	15	45
総 計		111	349

ノート

- a) B.O. は同名のタグバヌア族の部落、バタク族はその部落から何kmか山中に入った所に住んでいる。
- b) この部落には学校へいっている子供もどんな学校もない。
- c) [ ] の中の距離は州都、プエルト・プリンセサよりの距離である。
- d) 111家族の内3家族は他の種族と結婚している。

## B. スペイン統治時代よりの大きな人口移動

バタク族は4つの古い部落がもともとあったと考えている。それらはすべて海岸部に少なくともスペインの統治時代の終り頃から住んでいるといわれる。次の図はこの頃からの大きな移動の記録である。(tr.Transfer)



## C. 住居分布

### 1. リブソ

データーは8月23日の訪問によった、聞き込みはアルマンドから行った。1951年にマオヨンから17家族がリブソへ移動したという。バリオ・キャプテンは Luis Aluipen(50才)であり、スムロッド生

れ、独身である。

家 族 名	生れた土地	
(1) Wawa = Nanawa	Binduyan	Maoyon
- Maria		"
- Dotio		"
(2) Armando = Maria (Wawaの娘)	Maoyon	Maoyon
- Lenato		"
(3) Dotio = Marceria (Wawaの息子)	Maoyon	Maoyon
- Baro (タグナヤに住む)		"
- Patiten		"
- Igro		"
- Perician <sup>a</sup>		"
(4) Reynato = Basila (Armandoの息子)	Maoyon	Maoyon
- Fansisco		"
(5) Soy Patang = Lamul	Maoyon	Maoyon
- Licardo		
- Rusita		
(6) Ricardo = 妻・死亡 (Loy Patongの息子)	Maoyon	Maoyon
- Belinda		"
- Rasila		"
(7) Waking = Tane	Binduyan	Sumurod
- Claudio		Maoyon
- Toding		Maoyon
(8) Claudio = Merina (Wakingの息子)	Maoyon	Maoyon
(9) Osting = Unido	Sumurod	Maoyon
- Bendilon		"
- Bancas		"

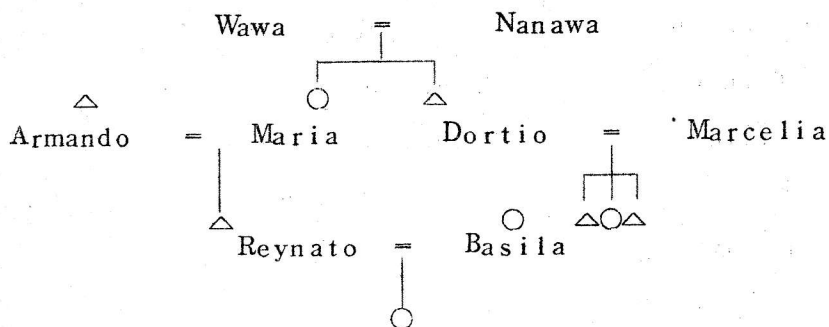


- |      |                      |          |          |
|------|----------------------|----------|----------|
| (10) | Placido = Meya       | Summurod | Summurod |
|      | - Rusing             |          | Maoyon   |
|      | - Feliberto          |          | Maoyon   |
| (11) | Otoya = Tombakan     | Summurod | Summurod |
| (12) | Boalan = Tuding      | Binduyan | Maoyon   |
|      | - Liticia            |          | Maoyon   |
|      | - Kayambong          |          | "        |
| (13) | Paulino = Amerio     | Maoyon   | Maoyon   |
|      | - 子供死亡               |          |          |
| (14) | Pablo = Manuela      | Maoyon   | Maoyon   |
|      | - Pining             |          | "        |
|      | - Badong             |          | "        |
|      | - Sebio              |          | "        |
|      | - Simon              |          | "        |
| (15) | Domingo = Castilias  |          |          |
|      | - Mingoi             |          |          |
|      | - J <sup>e</sup> uan |          |          |

次の二家族はKaingin（焼畑）をBambagという離れた所に作っており、刈入れが済むとリブソに帰ってくる。

- |      |                                 |              |  |
|------|---------------------------------|--------------|--|
| (16) | J <sup>e</sup> urio = Elina     |              |  |
|      | (JurioはCabayuyanからきたコヨノ族である)    |              |  |
| (17) | Polinario = N <sup>e</sup> ibet |              |  |
|      | (PolinarioはMaoyonからきたタグバタ族である)  |              |  |
| (18) | Ambor Abadineo                  |              |  |
| (19) | Rado                            | Medicine man |  |
|      | (バリオキャプテンの弟)                    | (医者兼祈とう師)    |  |

次の系図はこの部落の4家族の血縁関係を示している。



## 2. Summurod

聞き込みは Awa と Basilio から行った。サンラフアエロの Hildo Nalica によればバタク族は 1950 年頃まで海岸近くに住んでいたそうである。それから何度か移動をくり返して山中にはいり、1959 年には約 21 家族がわかれ、10 家族は現在のスムロッドの集落に住み、他は北に移動してカラクアサンに新しい集落を作った。Barrio Captain (部落長) は Tamang である。スムロッド生れ 55 才、父はマオヨン出、母はスムロッド生れである。

(1) Awa = Petak

(2) Tamang = Francisca

— Mejore

— Carolina

(3) Basilio = Kinaw

— Timbay

— Poneten

— Kitlaw

— Koso

(4) Timbay = Ampan

(Basilio の息子) - Armando (Ampan の前夫である。Tawang  
の息子 Junior との間でできた子供)

(5) Kano Kanoy = Carolina

(Dangadanga の息子) (Iamang の息子)

(6) Rogilio Sebedo = Sa<sup>a</sup>w

(Dangadangaw の息子)

(7) Claudio de Les Angeles = Tota

(タグバヌアとコヨノの混血、サン - Anesia

・ラフアエリから来た) - Meling

- Eliso

- Titaon

(8) Claudio Abeto = Awanan

- Busingen

- Lilia

(9) Doming = Kosu

(Doming は 1964 年 Aklon から来たピサヤ族である)

(10) Balbino = Emeliana

- Da<sup>v</sup>id Cal<sup>v</sup>ento

(11) Baka = Dangadangaw

(Dangadangaw は亡夫との間に 6 人の子供があった。4 人が生きて  
おり、Rogilio, Kanoanoy, Tota, Awauan である)

(12) Wanito

### 3. Calacuasan

聞き込みは Odoy から行った。彼はバリオ・キャプテンである。

(1) Odoy = Concepcion

(2) Tose Magbenua = Busibia

- <sup>a</sup> ~~T~~anito

(3) Kodesito Saluador = Taunita

(4) Begnardo Navaro = Nakinkeik

- Child

- Child

(5) Yanuel Elio = Akila

(Calundong の息子)

(6) Valentine Dancel = Tobit

(Valentine の前の妻との間に子供が 1 人ある。前の妻 Concepcion は現在 Odoy の妻となっている)

(7) Tuyak = Pelagia

- Child

- Child

(8) Salimbag = Sansise

= Child

- Child

- Child

(9) Pablo Dancel = Caridad

- Child

(10) Peli Radam = Emeliana Kagbanua

(11) Ramon Puno = <sup>C</sup>Conception Antulo

ノート

a) この部落には独身の者がいる。Miit Petoon Calundong

b) クリスチャン・ネームがしばしば出てくるのはバタク族がクリスチャンの他の友人の名前を使うからである。

4. Tagnaya



この部落の多くは戦後 Binduyan から移ってきたのである。部落は多くの者が 1965 年の 1 月にランゴガンに移ったので規模が小さくなっている。

バリオ・キャプテンは Luciano Baluntong であり、聞き込みは Carlos Tardin によった。

- (1) Luciano Baluntong
- (2) Barongao
- (3) Jaimi
- (4) Bahdo = Narika Adiring
- (5) Sakarias = Mgracia
- (6) Carnato Dencil
- (7) Leon
- (8) Kirito

(Son of Sakarias)

#### IV 自然景観

パラワン島は亜熱帯地区に属し、一年を雨期、乾期、間期（雨期と乾期の中間）の3つのSeasonに分けることができる。雨期は5月～8月、間期は9月～12月、乾期は1月～4月で、気温は年平均30℃前後であるが雨期よりも乾期の方が高温になる。

海岸線には珊瑚礁が発達しており、大きな河川の付近にはマングローブの林が、又その他のところでは砂浜が広がっている。

狭い海岸線の平野をはさみ、すぐ急な山がある。同島の最高峰はマンタリンガハン (68395 f) であるが、海岸線より山頂まで、全部熱帯降雨林に覆われていて、そのジャングルの中を縫う様にして蛇行した川が流れている。

ジャングルは、数人寄ってもかかえきれない程の大木と、その下に細々と生えているかん木とで構成されていて、下草というべきものはみられない。点在する大木は20～30mの高さを持ち、多くはラワンであった。

バタク族はこの様なジャングルを切開いて焼畑農業をしているが、この焼畑が役目を終えると、そこには先づ雑草が茂る。キク科、イネ科等が多く、1.5～2m位になる。そしてその次にかん木が生じ、その上に大きな陽樹林が形成される。ジャングル内の湿度は高く、木々の幹にはほとんど地衣類はみられず、コケ類ばかりであった。

パラワン島の成因は、各所にみられる赤土より火山活動によるものであらうということが推測できるが、ガケ等には薄い層を成した泥岩がみられ、一度沈降后、隆起したとも考えられる。

センザンコウ・サル・イノシシ・オオトカゲ・ニシキヘビ・マメジカ・キノボリネズミ・トビリス・リス・ウサギ・ヤマネコ・パラワンクジャク

パラワンワシ・コウモリ・等の動物が住み、又、多くの昆虫、魚類、鳥類  
などもいる。

## V 物質文化

### (A) 収入と生活程度

彼等はほとんどが自給自足であり、現金収入源としての生産物はほとんどない。米のとれるときは米と物々交換をし、例えば装身具、腰布などとりかえる。米を交換として使う時の権利は女性側にあり、そのため交換の対照となるものは主として女性のもので、ビーズ玉や腰布が多い。ビーズ玉は彼等の宝物として珍重されており、このビーズ玉でできた首かざり1つが米50ガンタ(1ガンタは2.5 Kg)と交換される。日本では5円もしないだろうに。一方男性に権利のあるものとしては、アルマシガがある。これは樹液をかたまらせたもので、木の樹にキズをつけ採集する。主として燈火用に用いられているが、マニラにもっていくと、薬品用にも使われている。採り方は、高い木の枝に、藤ゾルのついた弓を射てひっかけ、これを伝わって登っていく。上等なもの程、高い所でとれ、そのため高所に登るのは彼らの重要な技術であり又結婚の際の条件の一つでもある。彼らはこの採取したアルマシガを丸木船にのせたり、かついだりして町までもっていき売る。値段は100Kg 25セントボ(約25円)で、これが彼等の生活用具である蛮刃やマッチ、塩などを買うためにつかわれ、更には結婚の際の結納金にもなるのである。

彼らの恒久的な富といえば家屋、衣類、装飾品、そして食糧を獲得し調理するための道具、すなわち蛮刃、ナベ、竹製の弓矢、ワナ、舟、食器類その他竹や藤でつくった簡単な道具に限られている。

彼らは文化的、社会的、政治的には中央とはほとんど完全に隔離されている。彼等の住んでいる所は国有地であり従って彼等は公的には何ら土地所有をしていないことになる。



家畜としては、ニワトリ、イヌ、ネコ、ブタ、などがいた。最も普遍的なのはイヌとニワトリで、どの部落にも各戸に必ずおり、イヌは人間と同様、家の中で横になっていた。ニワトリは多くが籠や棚の中にいれられており、一軒で数羽～十羽程度しか飼っていなかった。

## (B) 衣 類

男性はG. ストリングス というふんどし様のものをつける。これは、Namoan という木の皮をはいて川の中で石でたたくいてなめしたものである。女性にはPatadiong という腰布をつける。主に町から入ってくるが、昔は女性も木の皮で作ったものをつけていたそうである。男性も女性も以上が全衣類である。

## (C) 装 身 具

頭髪は男女共黒く、ちぢれ毛である。女性はそれを伸び放題にしているが結婚した女性は、額を高く刈りあげている。これをGitという。足首には竹や金属製の輪を15～16本はめている。これはGalangといい、へビにかまれないと信じている。胴にはやはり竹製の輪をはめている。Sigutといい7～8本まいている。また腕にはBaklawという輪をはめる。いづれも竹製で、これには炭と木の汁を混ぜて作った液で模様をつける。この腕輪には布切れや香りのよい草などをはさむ。香りのよい草として、Palagpag, Tagdak Salosak などがある。耳には小さい時から穴をあけて針金を通し、ビーズや綿クズなどをたばねてつるす。首には小さなビーズの首飾りをつけ背の方にはトビリスやサルなどの野生動物の毛皮や草を束ねたものをつるす。

これらは女性の装身具であるが、一方男性の装身具はほとんどない。

全般的にみて、いれ墨や体を染めたりすることはおこなわれていなかった。

#### ④ 食 生 活

バタク族の食糧の中で最も安定したものは米である。稲作は雨期におこなわれ、収穫期は7月～10月で、この間彼らはほとんど米食となる。野菜類はあまり摂らず、米のあるときはほとんど米だけの食事となる。米のない時は芋類が主食の代用となる。タンパク源としては、時折ワナで捕えられるイノシシやサル肉、貝類（海産のものが主）、魚類（淡水産が主）などがみられたが、一般に肉類はあまり摂らない様であった。また植物性タンパク質源として、豆類がわずかみられたがまだ食糧の対照にはなっていない様な状態であった。

食事はほとんどが米だけ、もしくは芋だけといった簡単なもので、その中にわずかの野菜類が入る。栄養は過度に片寄っており、炭水化物の摂りすぎで、それは彼らの体格にもよくあらわれていた。背がひくく、腹が出ていて（これはマラリヤの為でもある）体格は貧弱である。

食事は昼食と夕食の2回しか摂らず、時間は昼食が12時頃、夕食が午後6時頃である。料理は、鉄製のナベでおこなわれ、ほとんどのものは煮るか焼くかして食べ、生のまま食べるものといえはわずかな果物位である。味つけは塩が用いられ、全て煮るもので味の無いものは塩味をつけて食べるようである。また食事の摂り方は、食物を手でつまんで口へ運ぶといった方法で、スプーン・フォークの類はみられなく、1つの容器に入れたものを家族みんな、もしくはその家に住む人全員で手でつまんで食べていた。食器は、他からの文化の入ったところではセトモノ（日本製か中国製）が使われていたが、ない所ではナベから直接とって食べていたり、バナナなどの葉に盛って食べたりしていた。

水は生物が生きてゆくためには必要欠くべからざるものであるが、バタク族においては水の問題はそんなに大きな問題としてはとらえられていない様に思えた。

彼らの家は畑の中につくられる。多くの場合、それは山の急斜面を上り

つめたところにあり、水のあるところから20～30分歩かなければならない。水くみはほとんど男の仕事で、直径15cm、長さ1m位の竹の節を抜いて筒をつくり、それを背易い良い様にヒモをつけて、毎日急斜面を往復する。飲用水は川の水が使われ、山間の湧水は清潔な水として平気で生水をのんでいる。一日に数回（普通2回位）も急斜面を水を運んで往復するのはそんなに楽なこととも思えない。稲穂を運ぶのとどちらが重荷になるであろうか。これは水よりも食糧の方が重要である為だろうと思う。

#### (E) 栽培植物

バタク族の主食は乾期と雨期で異なり、雨期には植物の栽培が可能で、畑をつくり、稲作をおこない、この米が彼らの主食となる。米がとれるのは7月～10月でこの間彼らは毎日米をたべる。乾期になると植物は育成しなくなり従ってこの期間はおっぱら採集によって食物を得ることになる。ジャングルの中から野生の果物や芋などをとってきて、それが主食の代りとなる。野生種が食用となる場合には、種類によって独特の毒ぬき法や料理法がでてくる。

我々の訪ずれたのはちょうど雨期の中頃にあたり、米の収穫が始まってしばらくしてからだった。従って観察されたものは全て雨期の食物で、乾期の食物については聞きこみ調査によって調べたため、雨期のものに比しかなり不正確で不確実なものしか得られなかった。雨期の栽培植物及びその他野生植物については、ほとんどを観察でき、又或物については実際に味わうこともできたが、乾期のものは、話によってただ記載したものからジャングルの中からとってきて手にとり、口にしたものまでまちまちである。

#### 部落周辺

乾期になり、稲作が終ると彼らは焼畑をすてて川の近くにおりてくる。

今まで各自の畑にちらばって生活していたものが一ヶ所にあつまってくる。これが部落である。従ってこのシーズンには定着生活をするわけであるが、部落はたいてい河岸段丘の平らな所につくられており、その周辺にはバナナ、ココナツなどが植えられている。

部落ができるとそこには多年生作物がうえられる。カモテ、バナナ、ココナツなどである。これらの植物は成長し、実がなるまでに数年から数十年かかるため、その周辺にある植物によって、その部落のその地における歴史の長さがわかるわけで、最もわかり易いのはココナツである。今回訪ずれた4つの部落においてもそれは明らかで、リプソー、カラクアサン兩部落ではココナツがもう6~7mになりかなり古いことを示していた。又、スムロッド部落においてはバナナ林だけでココナツはまだなく、タグナヤ部落においてはバナナもみられず、カモテだけがあった。

これらの部落周辺の植物は乾期、米のない時の食料源となっており、カモテはそのうち最も重要なものとなっている。

また、各部落による栽培植物の構成はそれぞれちがっており、どんな植物があるかということで、その部落の文明化の程度も知ることが出来る。たとえば、リプソー部落においてはオレンジ・パイナップルなどの果物がみられたが、これは他からもちこまれたものである。このことは、この部落が外部から入り易いために今までに多くの人々が訪ずれており、それらの人々が持込んだもので、多くはカドリックの布教が目的で来た宣教師によっておこなわれている。一方タグナヤ部落においてはほとんど外部から人の入ることがなく、周辺の植物もカモテ、イネ、アワなどの他はほとんど野生のものである。

文明の波は次第にこれらの部落にもおしよせてきているが、それらの歴史及び文化の波及程度はこれら植生によっても推し測ることができる。



## イ ネ

彼らの最も安定した食糧は米である。1年の3分の1を米食ですぐす。この米作は稲の性質をうまくとり入れた彼ら独特の栽培法によってなされている。イネには稔りの遅速、味、形態、香りなどにより二十数種あり、彼らはこれらのイネを早生から晩生まで栽培しており、各種のモミを1ガンタ（約2.5 Kg）づつ翌年のためにとっておき、畑ができるとそこに各々の種子を、ある一角からまいてゆく。一種につき1ガンタだけまいてしまうと別の種のモミをその次へつづいて播いていく。こうして畑のある限りモミを播くと、それで種マキは終りとなり、たとえモミが余っていてもその年はそれ以上は稲をつくらない。従って焼畑の面積に応じてその年につくるイネの量は変わってくる。播種の方法は、まず畑が出来ると木の棒で地面に穴をあけそこにモミをまいて、土で覆っておく。このモミは前述のように、前年より保存されていたもので各穴には数粒～数十粒のモミが播かれる。（これは実際に観察できず、すでに大きく成長した稲の1株の茎数より推定した。）そしてモミを播いてしまうとそのまま放っておく。あとは多雨と高温とによってどんどん成長してゆく。この播種の際の穴のあけ方はランダムで、株間の距離は表1の如くで、平均36cm位である。

表 1

測定値 (cm)	20	27	30	31	32	33	34	35	36	37	45	50
測定数	1	1	1	1	1	5	1	1	1	2	3	2

稲が稔ってくる頃になると、広い畑に模様ができる。早生のところは早く黄色になり、晩生のところはまだ濃いみどり色になっている。従って、播種を終ると、どこからどこまでが、どの稲なのか、区別ができないが、穂が出始めるとその区画が明瞭になる。

彼らはまだ財の蓄積、貯蔵、ということを知らない。米の収穫もその日暮して1日分の米しか収穫しない。彼らは早く稔ったものから順に収穫し

ている。早いものでは  
3ヶ月、おそいもので  
5ヶ月位で収穫できる  
が、これらイネの種類  
の選択は彼らにとって  
は非常に重要になって  
くる。

イネの種類について  
今回の調査では20種  
のイネについて記録す  
ることができた。その  
うちの数種については、  
特徴、形状、などにつ  
いてくわしく調査でき  
た。次に、これらのイ  
ネの各々について述べ  
てみる。稲の呼び名は  
彼らの呼ぶ通り記録し  
た。( )内は観察し  
た部落名である。



「稲を収穫する女」

稲は穂だけ摘みとりもちかえる

(Sumurod 部落)

(1) Inaporaw - non (Sumurod)

やわらかく、香りがよい。モミはやや大きく、熟すと黄色になる。3.5  
ヶ月位で収穫可能となる。(表2)

表 2

No.	1 株の茎数	丈	穂の長さ	一穂につくモミ数
1	10	170	27	207
2	8	156	30	229
3	14	185	28	192
4	5	166	27	155
5	4	163	27	161

## (2) Maraguket (Tagnaya)

モミが大きく、トゲがたくさんついておりさわるとチクチクする。モミがやや黄色味を帯びた頃収穫して Dry Rice にする。

## (3) Kinawayan

小さな細長いモミで、初めはミドリ色をしているが熟してくると黄色になる。

## (4) Marandi

Inaporaw - non と同形、同味、同色だが本種の方がやや収穫期がわかる。

## (5) Knabayo (Sumurod)

モミは黒色で大きい Maraguket より小さい。やや細長いかんじで、収穫期まで 4～5 ヶ月を要する。(表 3)

表 3

No.	1 株の茎数	丈	一穂につくモミ数
1	8	155	157
2	12	160	179
3	10	165	204
4	8	155	154
5	9	161	145

(6) Tatlonga Buwon (Sumurod)

形態はInaporaw - non Marandiと同じであるが、実入りがよく、やゝ小粒。彼らの栽培するイネの中で最も早く稔り、収穫まで3ヶ月で、このイネの名前のTatlongaは「3」、Buwon は「月」という意味である。(表4)

表 4

	茎 数	丈	粒 数
1	1 7	1 6 0	2 4 1
2	1 4	1 6 3	1 3 7
3	1 9	1 7 2	2 1 5
4	2 0	1 7 5	2 7 4
5	9	1 7 0	2 7 9

(7) Kiaporan

形態はInaporaw non, Marandi と同じ。収穫までに4～5ヶ月を要する。

(8) Manong Balay

Inaporaw non, Marandi, Kiaporan などと同じ。収穫期のちがいでわかる。

(9) Pino - Pino (Lipso, Sumurod)

彼らの栽培するイネのうちで最も小粒の実をつける。普通につくられ、収穫期は4～5ヶ月。

(10) Yinomero

(11) Sulyap

(12) Magin - Danao

(13) Kalandasan

(14) Diongco



(15) Binik - Turyo

(16) Rakumbaw

(17) Basilanen

細長いモミで Kinawayan についで長く、香りがよい。モミは熟すと黄色になり、約4ヶ月で収穫できる。

(18) Mara - Virya (Lipso)

赤い色のモミで、丈は1m位でそんなに大きくない。実は白色をしている。

(19) Manambat

Inaporaw - non , Marandi , Kiaporan などと同型、収穫まで4～5ヶ月を要す。

(20) Mansingan

Basilanen と同型であるが収穫期は本種の方がやゝおそい。

これら20種のうち、その稔りの早い順に挙げてみると、

① Tatlonga - Buwon,      ② Inaporaw - non

③ Marandi      ④ Basilanen      ⑤ Mansingan

となる。

これらのイネは、早く熟したもののから順に穂だけ刈りとってくる。彼らは1日昼食と夕食の2回しか食事をしないが、起床時間はだいたい日の昇る午前8時頃で、起きると腰にカゴ (Buggyas) をつけて、小さな穂切り包丁をもって畑に出かける。この穂切り包丁は現在は鉄製品を使っていたが (Sumurodにて) 古くは石や貝を用いていたらしい。そしてこの包丁で穂の部分だけを切りとる。穂は畑の角から順に刈りとっていくのではなく、畑の中に入りこんで、稔っている穂から刈りとる。こうして腰カゴが一杯になるとそれを家にもってきてザルに入れ、その穂を1つ1つ脱穀する。脱穀の方法は、2つの二枚貝を左手にもち、右手に穂をもち、これを貝にはさんで引いてモミを落とす。そしてこのモミをザルにいれていろりの上に

つるし、これを乾燥させる。いろりの火は常に絶やすことなくもえており、その上で約2時間程煙に包む。ここまでは女の仕事で、男はその間何もしないでゴロゴロしている。

次にモミをウス (Rusong) に入れる  $m$  位ある木の棒 ( ) についてモミ殻をとる。これは男の仕事になっている。モミをよくついてそれをモミガラと米粒に選別する時には風を利用しておこなっていた。

こうしてつくられた米はナベに入れて煮て食べる。煮るときは米と水だけで、他には何もなく、食事ほとんど米ばかりのようである。

収穫された米は、たいてい2食で終わってしまうが、余った場合は次の食事にまわされる。もしその様な場合に、畑にとりに行かなくてもその日食べるには困らないだけの量の米があるときは畑には出ず、持ち米がなくなると収穫作業が始まる。

#### タローイモ・ヤムイモ

タローイモの多くは茎、葉、芋と全部食用にされていて、茎、葉は主として雨期の食べものに、芋は乾期の食べ物に利用されている。栽培種としてもつくられ、タローイモは草原に、<sup>ヤ</sup>ムイモは河原の砂地につくられていた。タローイモには次の様なものがあった。

##### (1) Parawan - Karadi

茎、葉とも緑色をしている。フィリピン国内でパラワン島にしかみられない種類。

##### (2) Original - Karadi

茎が赤褐色をしており、フィリピン国内に広く分布している。

調理は、茎、葉は小さく切って塩を加えて水煮にして食べる。芋はただ煮て食べる。

ヤムイモは2種あった。野生種と栽培種があり、芋だけが食用に供され、調理はいづれも小さく切って煮て食べる。

(1) Ubi

根は塊状をなし浅いところにてできる。これは宣教師が外部から持込んだもので、バタク族古来のものではない。

(2) Abagan

野生種。乾期に米がなくなると利用する。根は長細く、深く堀らなければならぬ。

カモテ (Camote)

カモテは根に多くのデンプンを含み、乾期における彼らの重要な食料となっている。移動の際彼らはその茎を切ってもってゆき、それを挿木することによって新しい土地での新個体の増殖を計る。栽培地は部落周辺で、適当な空地をみつけて植えているようであるがその植え方は全くランダムである。

カモテには 2 種ある。

(1) Maranbogan

茎はまっすぐに伸び直径 3 ~ 5 cm にもなり、表面は堅く、赤味を帯びる。丈は 2 ~ 3 m になり、1 つの株には十数本の茎がある。葉はヤツデの葉に似、10 枚程度の突起がある。食用にされるのは根の部分で、芋は直径 10 cm 長さ 30 ~ 50 cm 位になり紅色をしている。収穫期は米作の終る 10 月から 12 月頃までの約 3 ヶ月間で、必要なとき堀りおこして、輪切りにして火で焼いて食べる。時には米があっても食べることがあるらしい。

(2) Camote

サツマイモと同じもので、茎、葉、根とも食用にされる。は地をはい、ツル状で暗赤褐色。葉はハート型。茎の途中より根を出す。茎の先端部は緑色でその部分が食用になるが古い部分は食用にされない。根は紅色の芋である。葉、茎は主に雨期に野菜として用いられ、水に塩を加えて煮て食べる。根は前種同様火で焼いて食べる。

## バナナ

バナナは部落の周辺にみられ、定住の初期の頃の期間の長さを計るバロメーターとなる。タグナヤ部落においてはまだ全々栽培バナナはみられず、あるのは野生種だけであったが、スムロッド部落においてはバナナ林を形成していた。

バナナには次の様な種類がある。

### (1) Saba

樹も花房も大きくなる。実は三角形をしており、まだ熟さないうちから食用になる。花も食用になる。( Banana Pusó ) 実は熟す前は皮に傷をつけるとネバネバした液をたくさん出す。結実もよく、大きな房をなす。

### (2) Arikondal

黄色で普通型のバナナ。皮はなめらかでやわらかいが、実にアクがあり塩でアク抜きをしないと食べられない。

### (3) Karao

実の皮が赤い色をしている。中味は黄色であるが、香りがよい。木も又赤味をおびている。

### (4) Tindok

実は熟しても黄色くならず、緑色をしている。よい香りがする。

### (5) Lakatan

黄色く、長くて大きな実をつけるが味の方はあまりよくなく、淡白な味である。

### (6) Wild Banana

野生種で種子ができ、食べられない。樹は貧弱で小さく、結実も悪い。

主食の代用となるもの

稲畑の中のところどころにみられるトゥモロコシ、Dawa, Cane, 部落

周辺にみられるパパイヤなどが主食の代用としての役割を果たしていた。これらの食物は目的があって作っているわけではなく、米に飽きた時に食べたり、または保存しておいて食物がなくなったときに利用する程度であり、作付面積も米の1%もしくはそれ以下である。

(1) トウモロコシ

茎の高さ、実の大きさ等ほとんど日本でみられるものと大差なかったが、我々の調査期間にはトウモロコシは収穫期を終わっており、枯れたものしか観察できなかった。実は皮をむいて家の中につるしておき食べ物のなくなったときにそれを利用するらしい。(スムロッド部落において)畑にあるもののほとんどはサルによって荒らされており、一粒の実も見えなかった。

(2) Dawa

アワのこと。穂は大きく、日本でみられるものよりも優れているものもあった。実が稔ってくると、穂に触れるとバラバラと実がこぼれてしまう。収穫期は稲と重なり、8月頃である。穂をとってきて脱穀し煮て食べるが、あまり利用されていないようである。

(3) Cane

茎には糖分が少なく、噛んでも全々甘味はないが形態はサトウキビに似ている。イネの畑の中にあちこちに立っている。3~5m位になり、その穂は稔ってくると濃褐色~黒色になり、ウスについて食用にされるが、全体に非常にすくない。

(4) Papaya

外部から入っていった植物らしく、最も文明化のすすんでいると思われるリブソ部落においてのみたくさんみられた。3~4mになると葉の根本に花がつき、1ヶ所に数個の実がつく。雌雄異株で、雌株は大きくなってから花をつけるのに対し、雄株は2mにも満たない位の木でも花をつける。花は淡黄色をしており合弁花である。雌花は大きく数個の花が並んでつい



ているのに対し、雄花の方は小さく房状をなし、無限花序である。

実の形状によって4種にわけられる。

(1) 小形でウリ型のもの、(2) 大型でウリ型のもの、(3) 中型で細長くなるもの、(4) 中味の赤いもの、の4つ。

調理はいづれも皮をむき、中の種子を出して切りきざみ煮て食べる。味は冬瓜を煮たときのそれに似ている。雨期は木の成長に伴い実もどんどん大きくなるだけで中味はなかなか熟してこないが、乾期になると木の成長が止りそれに伴い実も成熟してくる。普通、実は20～30cmになる。熟してくると黄色になり皮がやわらかくなってくるが、そうになると生のまゝ食べられる。少々アクがあるがうすい甘味がありおいしい。

(5) Corot

野生の植物で、根は丸い芋になり表面はかたいヒゲ根がたくさん生えている。大きさは普通直径10cm位で、芋は空気にさらしておくと緑色になる。地上部はツル状で葉は3枚の小葉より成る。表面はクチクラが発達していて、葉柄には毛はない。茎のところどころにトゲがある。食用に供されるのは芋で、毒がありそのまゝでは食べられないので毒ぬきをしてから食べる。救荒食で何も食べるものがなくなると利用する。主として5～7月頃に使用される。調理法は、

- ① 皮をむいて薄く切る。
- ② 日光の下で乾燥させる。
- ③ 海水中に1日間つける。
- ④ 水で洗い、ゆでて食べる。

といった手順でなされる。ジャングル内での分布はひろく、随所でみられた。

この他に主食の代用品としてハチミツがある。野生のミツバチからとったハチミツであるが、何も食物がなく、狩りにも採集にも行けないとき、(雨がふり続いたりしたときなど)ミツをなめて、横になっているという。

## 副 食 物

雨期には米が、乾期には芋類が主食となっていることは前にも述べたがこれらの食物の他にも「おかず」として食べられているものがある。その多くは野生で、主食に比して比重も軽く、なければ使わないといった様なものが多い。

### (1) Tomato

野生。ジャングルの各所に自生しており、実は直径1～1.5 cm位の球状で熟すと橙色になる。香り味ともに日本でみられるものと変りがなかったが、皮が非常に厚い。生では食べずCamote, Pepperなどの葉と一緒に煮て食べる。

### (2) String — Beans (Sitao)

ささげ豆のようなもので、実は20～30 cm位になる。畑のすみや家の前などに植えられており、リブソ部落では豆棚もつくられていたがそんなに多くなく、実のまだ熟していない緑色のものを食用にする。

### (3) Kamote Leaves

Kamoteの葉。芽、若葉がつかわれ、ゆでて食べる。

### (4) Banana Puso

Sabaというバナナの花。まだ開花していない花をとってきて、大きな赤褐色のガクをとると中に淡黄色のバナナの花がきれいに並んでいるが、それを、先端部分だけ切りとり（メシベの部分ですてる）花弁を小さく切って水で煮る。

### (5) Patala

ヘチマのこと。まだ熟していない実をとってきて煮て食べる。黄色の花をつけ、雌雄異花。実は20～30 cm位のとき食用にされる。

### (6) Egg Plants

ナスのこと。彼ら個有の栽培種で、実は細長く3×2.5 cm位で、先端部は緑色をしており茎に近づくに従って紫色が濃くなっている。

(7) Korat - Korat

キノコのこと。湿った樹間に生える。雨期にのみ得られる。色は暗褐色で裏は白く、香りはよい。このキノコを採る時期について彼らは「雷が鳴って2日後とりにいくとよくとれる。が更に2日後に行くともうとれない」ということを知っている。腰にカゴをつけてジャングルの中へ採集にいき、とってくると塩を加えて煮て食べる。

(8) Ampalya

レイシの一種。栽培化されており、花は小さく黄色で、雌雄異花。実は緑色で表面はでこぼこになっており、大きさは直径3~4 cm長さ20~25 cm位。皮は生のまゝ食べると苦い。

嗜好品

バタク族の食べ物は、そのほとんどが炭水化物で占められており、味づけとしては塩が用いられるのみである。全般的にみて彼らの食事は薄味であるが、その食事の添物として香りのよいものや刺激になるものが用いられている。それらは我々の感覚からみればほとんど普通のものと変りがなく、香りも刺激（から味、苦味など）も非常に弱い。

(1) Pepper

トゥガラシの一種の葉が用いられている。草は各所に自生しており小さな三角形の実をつける。実は熟してくると黄~赤色になる。草丈は70~80 cm位で、この葉をつみとり塩水で煮て食べるのであるが、香りも味もほとんど感じられない。

(2) Songcor - Songcor

Pepperと同じように利用される。各所に自生しており、葉は五つの小葉より成り全体が白い小毛によっておおわれている。実は大きく、3×6~7 cm位ある。

(3) Ginger

ショウガの仲間。丈は1~1.5mになりその地下茎が食用にされる。生のまゝではたべず皮をむき煮て食べる。これは胃の薬としても使われる。

(4) Palagpag と Togdok

ハッカの一種でよい香りがし、この香りがつかわれる。

Palagpagは緑色の茎をし、Togdokは赤褐色の茎をしている。各所に自生し、小枝をおって使う。草丈50~80cm位

(5) Buyo

カミタバコの原料。山野に自生するがあまり多くないらしく大切にしていた。この草の葉を干してカミタバコにする。

(6) Bonga

ヤシ科の植物でその実はココナツの実を小さくした様な形をし3×4cm位の大きさになる。実は噛みタバコの代用品として使われるがあまりおいしくないらしく、タバコの切れたときにのみ利用される。



果 物

主として子供の食べ物となっている。多くは外

「煙草を吸う女」

煙草は火のついた方を口に入れて吸い、時々灰を吐き出すこうすると体が温まるという。

(Sumurod 部落)

部よりもちこまれたもので、外部と最も交流のあるリブソ部落においての

みみられた。

(1) Casoy

3～5月収穫。2～3年前にもちこまれたものでまだ実をつけていない。

(2) Suha

みかん科の一種でザボンに似ている。クリスチャンが持込んだものでこでの最大の木は根本の直径が15 cm位高さ6 m位で、約40個の実がついていた。実は熟すと黄色になる。小枝にはトゲがあり、葉は15～20 cmで副葉(3～5 cm)がついている。

(3) Pine Apple

ハワイより来た米人宣教師によって移入されたものでまだ小さく実をつけてはいない。

(4) Orange

5年程前クリスチャンによって持込まれたもので実は球形をしており直径3～5 cm。緑色のままとって食べる。木は上に向ってのびる。

(5) Bis - Bis (Lemon)

クリスチャンによって持込まれたもので日本でみられるものと同じ型をしている。

(6) Panka (Jack - Fruits)

栽培化されており木はかなり大きくなる。実は20～25 cm×70～80 cm位に成長し、中心に大きな1個の種子があり、その周囲は厚い黄色の果肉で被われていて、甘く、よい香りがする。結実から実が熟すまで3ヶ月程かかり、まだ若いうちは緑色をしていて、塩とヤシミルクで煮て食べることができる。

(7) Popuan

野生のPankaで実は直径12～15 cm位のほぼ球状をしており、表面はゴツゴツしているが中には多くの種子が入っており、その種子のまわりの赤いドロドロのものが食用になる。味も香りもあまりなく、たくさんた



べるとアレルギー症状を呈すことがある。ジャングル内に自生しており、子供のおやつ的存在。

#### (8) Sugar Cane

リブソ部落、カラクアサン部落においてみられた。外部から持込まれたもので、まだ歴史は新しいらしい。

#### (F) 焼畑 (Kaingin)

雨期の間、稲作がおこなわれるときは、稲は焼畑に栽培される。畑の位置は、河畔の部落をとりまく周囲の急斜面にあり、近いところから順に畑をつくっていく。

畑の位置や広さは部落のミーティングによって決められる。乾期になると男はジャングルに入り、木を切り倒す。大きな木は根本に足場を組んでオノで切倒す。そして乾期の終り頃、切倒した木をもやして、これで畑ができる。ジャングル内の木は不定で、従って畑のあちこちに大木の切株が立っていたり、皮だけでもえて黒くなっている木の幹などが散在しており、あまり上等の畑とはいえない。

ここまでは男の仕事とされており、女は家で料理する程度の仕事しかもたない。

畑が出来ると、一家総出でモミ播きが始まる。モミを播いてしまうともう畑はそのまゝで実が稔るまで手を加えない。

このモミ播きの前、部落の各家は各自の焼畑へと散ってゆく。そして1～数家族で1軒を畑の中にかまえる。この家は稲作の終るまで焼畑の中にある。

焼畑はふつう一軒で50m×100m位の大きさをもつ。畑は山の斜面をそのまゝ利用しているため、傾斜がはげしく、ひどいところでは30°位になっている所さえあった。

雨期が終り、稲のとり入れが終ってしまうとその畑は放棄し、又次に新

しく山を切開いて畑をつくる。

### (G) 衛 生

衛生観念はあまりない。手指や体を洗うことはあまりなく時折川に入り河原の石で体をこするのが入浴の代りらしい。年中裸同然の生活のため、衣服の汚れを気にしなくてもよいためかもしれない。歯をみがいたり朝起きたら洗顔するといったことは全くみられなかった。そのためほとんどが虫歯をもち、体には皮膚病をもつ者が多かった。足などにはおできが来ていたり、素足でジャングル内を歩くために生傷があったりで、みんな何らかの形で傷をもっていた。マラリヤも多くが罹病しており、下腹部が前につき出していた。慢性のマラリヤにかかっており、これによる老人子供の死亡率もかなり高い様に思われた。

スムロッド部落においては家の床の下で火をたきその煙によって蚊や蠅を追いはらう方法を用いていた。ゴミはみな床のすき間から下におちてしまいホコリのたまる様なことはなかった。しかし食器などは洗うことをせず、使用後はそのままにしておき、非衛生的であった。

病気の治療は薬草を用いたり、お祈りをしたりする。お祈りで治す場合には祈とう師がいて彼がお祈りをする。薬草の場合には、野生の草が用いられる。それには次の様なものがあった。

#### (1) Rayoma

英名 Rheumatism という。Banaba という木からつくられる。外傷したときに用いられ、葉を5分程湯につけ、その湯をのみ、葉は外傷部にはる。

#### (2) Castor Oil

Castor という植物の実を砕いて使う。ナス科の植物で2 m位になり淡紫色の花をつける。実には殻にトゲがあり実は下剤として使われる。

#### (3) Ginger

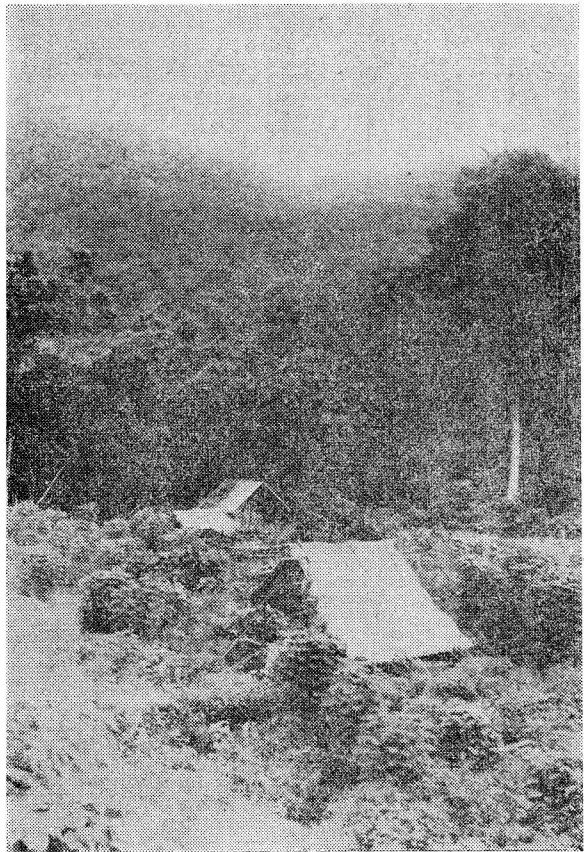
しょうが科の植物。し好品としても使われる胃の薬。

#### (四) 家 屋

##### I バタク族部落の概観

バタク族の部落は海岸より数km離れた山間に散在している。そして彼らは水が容易に得られる川の近くに僅かな広さの平地を見つけ、川に沿って部落を形成している。この部落の周囲の平地にはバナナやカモテを栽培し、その背後の山の斜面に焼畑を作り稲を栽培している。稲を作る期間は雨期であるが、この季節には焼畑近くに家を建て、部落を離れてこの家に住み生活をする。したがって雨期になると部落には空屋が目立ち、一部落に一軒の家しか人が住んでいないような事も起こってくる。

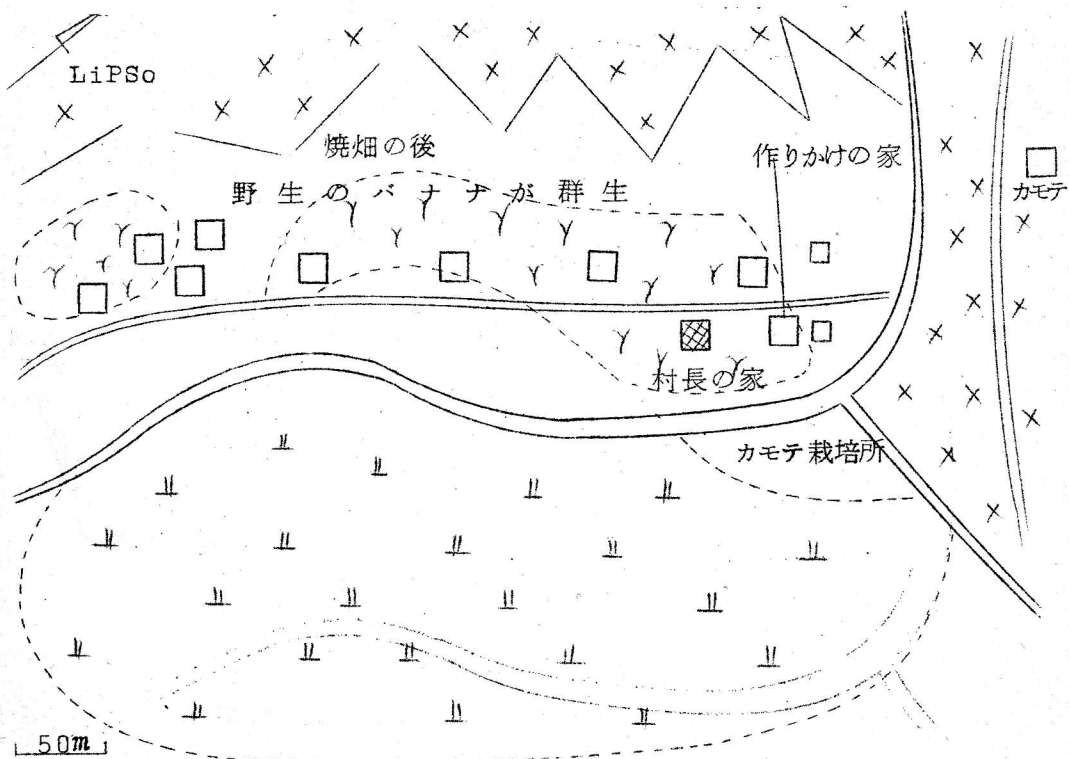
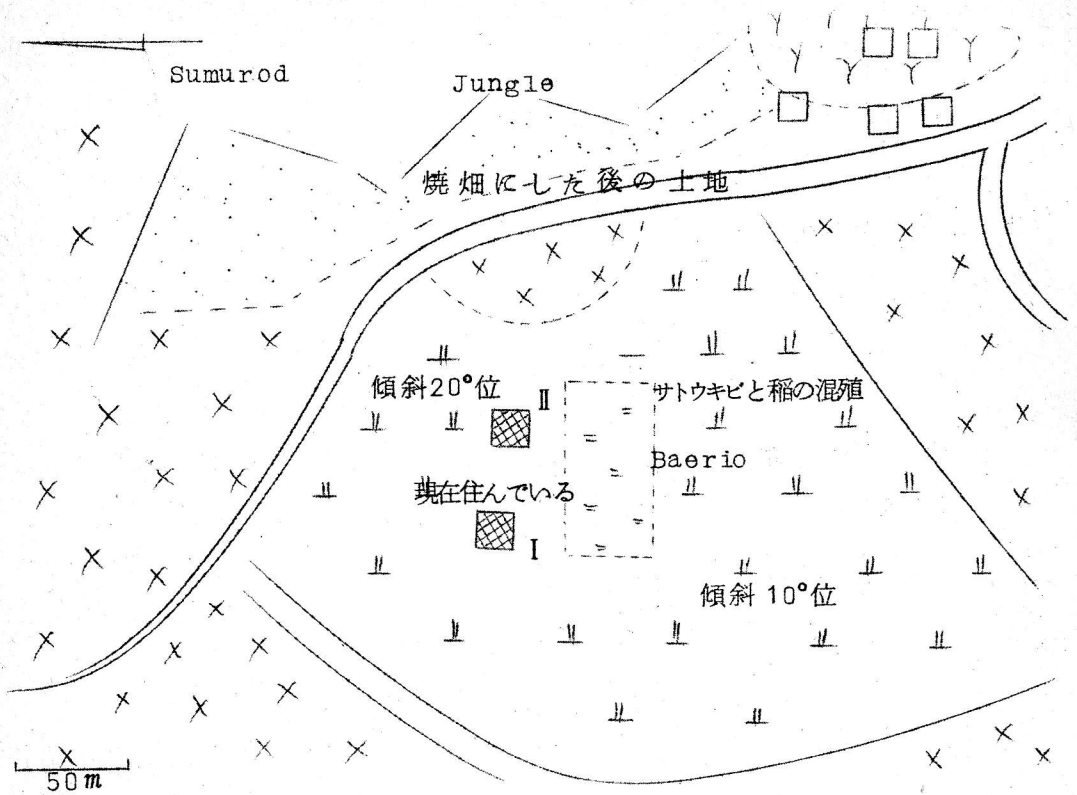
次に我々が訪ずれた4つの部落の概略図を示す事にする。



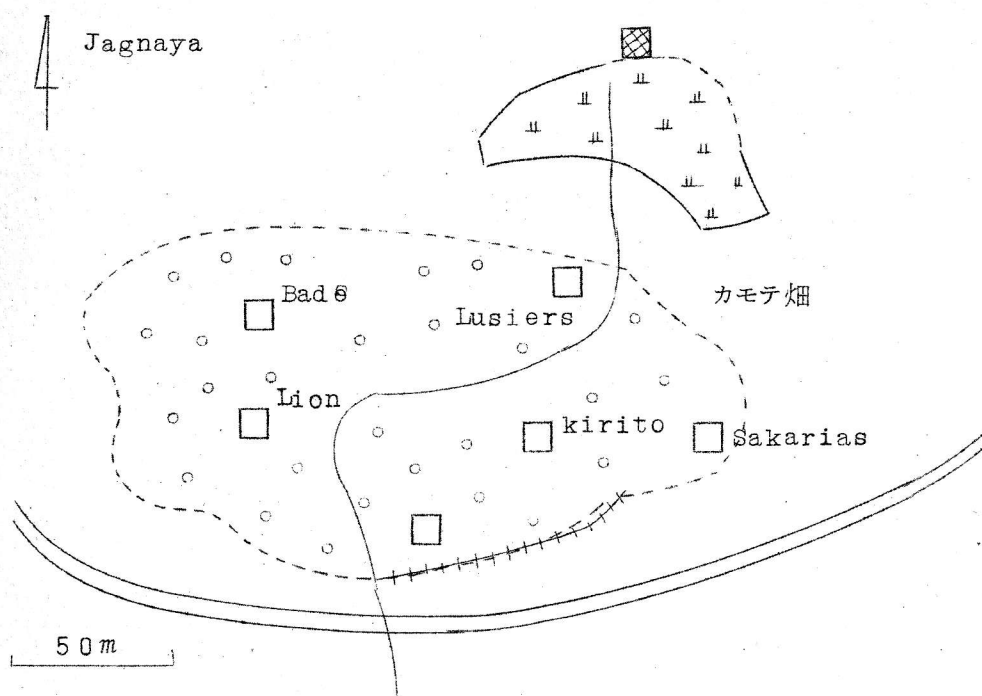
「部 落」

家の周囲にはカモテ（ヤツデのような葉をした植物）がたくさんうえられている。

(Tagnaya 部落)







## II 彼らの生活における家の機能

雨期においてもこの地域は、最低温度が $20^{\circ}\text{C}$  以下になる事はあまりなく、雨期といえども我々にとっては湿気も感ぜられないような気候であるので、彼らにとって家というものは、ただ雨、風をふせぎ、心地よく寝られる場所であれば、それで充分なのであろう。そのためか彼らの家のほとんどが $50\text{cm}$ ～ $100\text{cm}$ の高床式である。

彼らは焼畑における場合を除いて、一家屋に一家族が住んでいる場合が多く、共同生活を営んでいる場合でも血縁関係である。これに反して焼畑の中に建てる家屋には、ほとんど2、3家族が共同生活を営んでおり、血縁関係ばかりでなく、リブソ部落の焼畑ではタグバヌア人とも生活を共にしていた。

又住居以外の建物では、カラクアサン部落にタカログ語を教えるための建物が一棟あるのみで、農耕具置場としての小屋、祭りや集会の時などに



使用されるための公舎、神社などの建物は一切見る事が出来なかった。しかし豚小屋はリプソ部落で、又鶏小屋は各部落で見られた。豚小屋といっても丸太で四方を囲み、それに屋根を付けたものであった。

### Ⅲ 家の構造の概略

彼らの家の構造は各部落の他部族との接触の度合によって多少異なっているが基本的な構造は変っていない。例えば一般には、柱の組み立てはラタンと呼ばれるトウのような植物で組まれるのであるが、リプソ部落では、くぎを使用しているために、敷居が四角になっていて、床が板張りであった。これは、この部落にバタク族の言語を調査している外国人、及び部落内にタグバヌア人が生活している影響であると思われる。

家の組み方であるが、最初ベナタランという堅い木を四隅に立て、あと家の大きさにあわせて適当にその間に立てる。この間隔は一定であり、垂直を計るために上から糸で重りを下げている。そして床は、竹を平らに割ったものを、床の基礎となる木にラタンで編む。それ故床は 1~2 cm のすき間がある。


壁はバンガと呼ばれる、ヤシの葉に似た野生の植物の葉を交互に編んだものと、木の皮、竹を平らに割ったものをラタンで組み合せたものとがあり、各々の家によって材質は異なっている。

屋根も又、バンガの葉を交互に編んだものである。屋根の型は切り妻と寄せ棟が半々位である。

次に家の構造でもっとも一般的な例を図によって示す事にする。

I 切り込みがある

II 木の皮の壁

III  切り込み

IV 竹

V ハンガの屋根

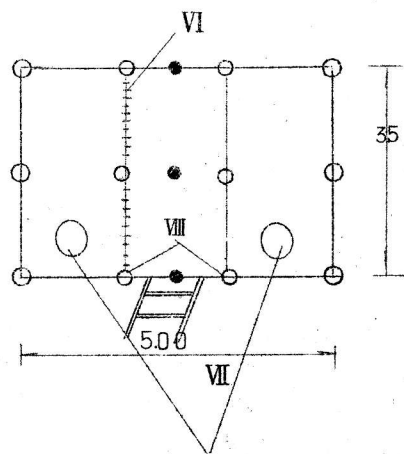
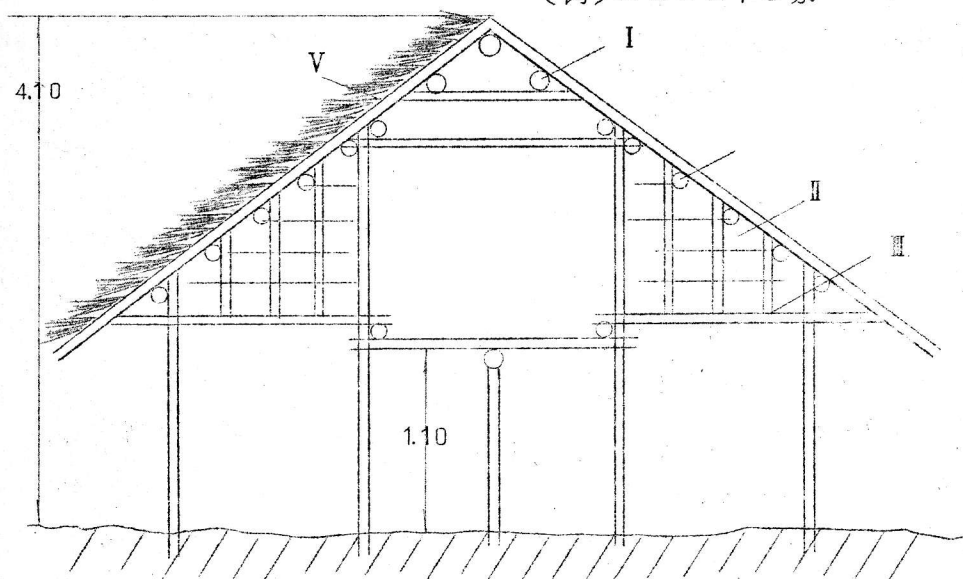
VI 壁

VII 入口、階段

VIII 炉

○ 階段は竹及び木をラタンで組んだもの、ハシゴと同じ

〔例〕スムロッドの家



## 家の建築について

家を建てるのは原則的にはその家に住む者の仕事であるが、老人の場合にはその親せき、又は部落の中の若者が老人のために家を建てる義務がある。上図の家はアワという老人の住家であるが、家を建てたのは親せきのワートという若者である。そして家を建てたからといって報酬は払られない。

次に上図の作り方、及び期間を記すと、最初の一週間は家を建てるために必要な木材の切り出し、次の一週間はその木材を組み立て、それから竹を割って床を敷き、屋根をふいて出来上りである。この間約3週間との事であった。又家を建てる際の儀式が終ってからの儀式は一切せず、部落長の家といえども特別な習慣はない。

## 家の内外設備

どの家にもある設備は炉である。この炉は床の上に平らな石を重ねて作っており、家の内でも風上に置かれる。これは、炊事のためばかりでなく、夜寝る時の暖とするためのものでもあるのだそうだ。次に照明としては、アルマシガという木からとった樹汁を固めて作ったものを木の葉に包んで燃している。この固体は木の名前と同じでアルマシガと呼ばれ、硫黄のような燃え方をする。現在火の源は下の部落からマッチを買っていて、全てマッチで火を起こしている。

家具としての機能を有するものはリブソ部落に一軒、竹で編んだカゴ（コオリのようなもの）があり、その中に衣類を入れている。その他の家では柱に掛けたり、家の隅にまとめて置いてある。敷物はやはりリブソ部落の村長の家に一枚あって寝る時に使用していた。他の家では寝る時、何もつけず日中と同様の姿で横になる。枕に相当するものもない。

タグナヤ部落の焼畑の中にある家に刈り取った稻を集めて貯わえる場所が見られた。これはこの部落にも一軒しかなく、最とも開らけたリブソ部落にも見られなかった。この稻を乾燥させるためにどの家にも炉の上方に

つり柵が作られており、又稲ばかりでなく衣類やその他のものも置いている。

便所の機能としてはリブソ部落に一つあった。これは地中に穴を掘りその上に木の板でおおい四方を木の皮の壁で囲みそれに屋根をつけた小屋である。この小屋は、この部落へ言語の調査に来ていた人のためであろう。原住民（バタク族）は木の繁みを見つけそこに穴を掘り樺を二本渡してある。しかし、普通は適当な場所で用を足している。

リブソ部落の家は入口の所にいたを置いて話し合いが出来るようになっている。

このようにして見てくると他人種と接触の多いリブソ部落では他人種の持っている知識をとりいれてきている。他の部落ではまだまだ彼らだけの様式を保っているように思える。

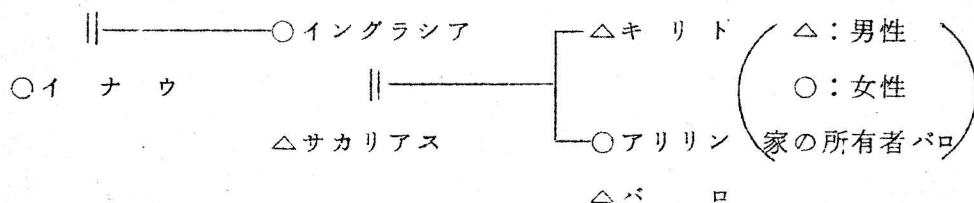
## Ⅵ 精神的文化

### (A) 家族組織

我々は雨期の米の刈入時に彼等の部落を訪れたわけであり、雨期における家族の生活は実際に見ることができたが、乾期のそれは家の所有者や戸主を聞く事によつて調べた。

雨期と乾期ではその家族構成も家の機能も異つており、乾期には彼等は比較的下流の川ぞいの平地に建てた家に住んでおり、家族は夫婦を中心とした核家族であり、雨期には、急斜面に作られた焼畑のそばに家を建て、二・三家族が共同で住む。この場合乾期の部落は基礎集団であり、雨期のそれは労働を中心とした、飯場的な要素を持つ機能集団とみて良いだろう。雨期に何家族か共同生活をするというのは、食糧を重視する結果、焼畑の中に住むようになり、焼畑に適した斜面を数家族に割当てる結果、一緒に住むようになったのだろう。この場合、焼畑の始まりから生産面で協同作業をする必要が生れ、そこから共同生活を行う必要性が出てきたとも言えるが、焼畑における共同作業は木を切り、燃やす事だけであり、一般の農耕における灌漑用水や下草取りなどの必要はここではないのでそれほど重大なものとはなっていない。これは結合の要因にも表われている。例えばタグナヤ部落では焼畑の中に4家族が1つの家に住んでいるのであるがその構成は下図のようになる。

△パロンガオ





このようなこうした場合の結合は血縁関係に重点が置かれている。またリブソ部落でもタグナヤと同様に同じ斜面に焼畑を作りながらもすぐそばに別の家を建てている例があり、同居しているのは血縁者だけであつた。友人関係や地縁関係で同居する事もないとは言えないが、人間関係としてうまく行く場合を除いては、やはり血縁を主としているようである。こうしたことから、純粋に生産を目的とした機能集団はまだ本格的には出来あがつていないように思える。ところがこの雨期の家は焼畑が変わるたびにいつたん崩壊するものであり、こうした血縁的な家族組織はまだ定着の段階に達していないと言えよう。一方乾期にはタグナヤ部落では、バロンガオ夫婦、サカリアス夫婦、バロ夫婦、キリト共に各自一戸ずつ自分の家を持ち、同じ部落内ではあるが独立して別々に生活している。この乾期雨期の家族形態の相違は小規模な狩猟、採集生活の段階から、焼畑耕作への重点の移行ということにとらえられると思う。（しかし彼等の食糧生産が山中の急斜面を利用して行なわれる焼畑に依存する限りでは、この両者が一方に移行してしまうことはないであろう。）バタク族における家族は、日本の封建時代のような家本位主義的な家族組織を取らず、より原始的な夫婦を中心とした自由な人間のつながりで結びついている。これは血縁としての歴史的な結びつきの弱さや、富、財産の未形成ということによるのだろう。家族や部落内では、老人の力が強く認められており、若者は老人の望む事は何でも従うというルールが一般的であり、老人と一緒に住む時は家を建てたり、食物を分け与えたり、労働を手伝つたり、買物、伝達等すべて老人の言う通り従うようである。夫婦においては妻の権利も相当認められており、それは米を腰布やビーズ玉と交換するとき、妻が自由に処分できることや、離婚の際、妻が子供を養育したいか、したくないかによつて、自由に子供を引取つたり、男性側に育てさせたりする養育の権利、等は妻にあり、部落における投票権も平等に認められている。姦通においても女性は何ら罰せられることなく、しばしば離婚結婚がくり返されている。

タグナヤ部落でサカリアスにかみ<sup>かみ</sup>たばこを渡したところ先に妻にやつてしま  
い。もう1つ渡すと初めて自分で始めた所などにも端的にあらわれている  
ように思えた。彼等によると女性の数が少ないことが女性の権利を拡大して  
いる理由だと言っている。実際数の上では我々の訪問した4部落では、女  
性はいづれか少ないのであるが、それが一時的な現象であるか、長期的なも  
のなのか、また全体的な傾向なのかはつきりしない。部落間で斗争のある  
場合、原始人の間では、男子の出生を喜び、女子の出生をあまり喜ばず、  
はなはだしい場合は生れた子供が女子の場合は殺してしまうこともあるそ  
うだが、歴史に残る範囲では一件の殺人事件もなく部落間の争いもないバ  
タク族の生活ではこれも考えられない。土地の生産力の関係から、間引き  
の際に女子を殺してしまうのかとも考えられるが、彼等は或る木の根を女  
性に飲ませる事で避妊を行っているようで間引きは確認できなかった。野  
生の物を食べていてもそれほど食物に困るわけではない土地柄であるから、  
むしろ死産や出生後の幼児の死亡率が高いことなどから人口増加は自然陶  
汰によつて押えられている面も強いものと思われる。ちなみに人口は戦前  
の資料とそう変っていないほうである。結局財産や富の蓄積が未発展のた  
め、生産手段や労働力において男性の支配が確立していないのではないかと  
考えられる。彼等の間での血縁者の呼び名はAma (父) ma (母) ana  
(子供) 兄弟姉妹はすべて potol であり、それに年上という意味の  
magoran 年下という意味の mangrd をつける。おい、めいは共に  
kamanakan であり、おじ、おばは pogot である。いとこ、はとこは共に  
kaotaran であり、祖父は bai 祖母は apo である。赤ん坊の意味を表わ  
す中性の言葉はなく、男子 oyag 女子 nanao とそれぞれ表わしている。結  
婚に関しては、三身等までは結婚できないがそれ以外は許される。しかし、  
これらは倫理的なものであり、具体的な罰則はない。結婚や離婚が何度も  
繰り返されている状態であり、子供の血縁等は何んら結婚の届出や記録が  
ないのであるから、実際にたどるのはむづかしいようである。彼等は何ん

らかの形で皆血縁関係にあるのではなからうか。ここで注目すべきは一部にはいつてきているカトリックの影響である。フィリッピン全土でカトリックの儀礼オヤ制を独得の双系的家族組織の拡大要因として機能としていることがみられるが一部のバタク族はクリスチャンとなり、この制度を取入れて相互扶助の一助として、又家族関係の拡大に役立てている。カトリックといつてもバクフ族のそれは教儀を理解しているわけでもなく、年に数回町におりたとき教会にも立ち寄る程度のもののようだが、この場合儀礼オヤは町で彼等より生活程度の高い者になり、god parents は god child の食物や衣類の必要を満たし、子供は god parent の仕事を助ける。また god Parents が god child の家の焼畑で取入れを手伝うと刈取つた米はすべて god parent のものになる。

この点他の者が取入れを手伝つたとき <sup>Y<sub>3</sub></sup> ~~3/4~~ をもらえるのと異つている。ここでは子供の宗教教育を助けるという面はあまり重視されていないようである。本来 pabrino 関係では、ahijado と呼ばれる受洗者と、儀礼オヤの宗教的（靈的）関係なので、ahijado が死んだ場合、その関係は消滅するが現在では、例えば Ritual parent が死んだ場合、彼の子供にその co-parent food は受けつがれてゆく、この点に関しては他のフィリッピンの地域におけるそれと差異はないようである。社会の拡大と分化の原動力となる生産力の増大、商品生産の浸透等がないままに新しい外来文化に直面せざるをえなくなつた彼等がその代りに靈的な関係を拡大、強化し、協同社会における家族制度の拡大につとめているものと考えられる。しかもここでは各種の機能集団の出現による。村落共同体の解体という事は何ら出てこないで相互扶助的な拡大要因として取入れられているのが特徴的である。

## (B) 社会組織

バタク族の社会組織は、その生活が単純なことや素朴な民族性を反映し

て非常に単純なものとなつてゐるが、また一面では、はなはだ合理的なものである。彼等の集落は血縁と地縁にもとづく基礎集団が主であり、その基本をなすものはBarrio Captain (部落長) を中心とする Barrio meeting (部落の集会) そして、医者と巫子を兼用した witchdoctor (medicinemán) さらに警察権を司どる police man がある。いずれも男性がなつてゐる。Barrio captain は1名であり、Barrio meeting は部落の成年男女から構成されているが人数が少ないときは結婚した者は投票権を与えられる。witch doctor は1名であり時に見習いが1名つく、police man は2～3名である。Barrio Captain はBarrioの長老によつて選出される。年寄りは皆長老であるが年齢的にはつきりした基準はないようである。部落長の任期は1～2年であり、しばしば再選される。部落長の任務は、Barrio meeting を主催し、共同作業を決定する。焼畑の取入れが終り drink fest が行なわれたあと12月頃に近隣各バタク族の投票権を持つ者が集り、来年の焼畑を各部単位で決定する。そして、1月頃までにさらに各部内の集会で不公平のないよう割りふりするのである。この際にはdrink festはない、この焼畑の決定の際も部落長は何ら強制権はなく、意見の調整役、まとめ役として働く、他に部落員を病気にかからないよう気をくばるのも彼の役目である。Barrio Captain の権利は部落員がBarrio meeting の決定に従わないと、police man である村の若者に命じてその者をつれてこさせ罰として部落の草刈りをやらせる。Barrio meeting は不定期であり、取扱う主なものは焼畑の割りふり、共同作業としての部落の草刈り、水牛、野生のブタ等の動物がはいりこまないようさくを作ること、部落員が家をたてようとしたとき全員でsappontする相談などである。家を建てようとした者は、その旨Barriocaptainの所に申し出ると、集会で日取りを決め、皆で一緒に作つてやるのである、これらの共同作業は何ら報酬をとまなわない。また部落長その他の仕事も一切報酬はなく、部落の共有になるような資金もないようである。互いの



労働によつて補完しあつてゐるわけである。前述した如く、彼等は焼畑での稲の取入れはその日食べる分程度しか刈りとつてこないので、ここではいわゆる結関係に見られるような共同作業はない、なにかの都合で、例えば病気、出産、用事等で刈り入れができない場合の相互の手助けはあるが組織的なものではなく、この際の報酬は刈り取つた稲の  $\frac{1}{3}$  である。政治構造、生産構造、労働構造の結びつきが分ちがたいほど密接になつてゐるようである。バタク族は文字を有していないので文章として残つてゐるわけではないが歴史に残る限りでは殺人はなく、盗むもので一番最たるものは女性である。事実、簡単な家に住みほとんど自給自足の生活をしている彼等の間では、盗むものとてもあまりないが、我々の滞在中も一件の盗難、紛失もなく、我々が彼等の病気を治療してやつたり、食事に招いたりすると、取りたての新米を持つて礼にくるなど、こうした面では非常にきちんとした倫理感をもつて行動しているようであり、むしろ犯罪がないというのは彼等の生活環境や民族性の問題ではなからうか。女性を盗むことはしばしばあるようで五・六回の結婚歴を持つ男女は少くない。発覚すると男は前の夫が結婚するとき支払つた金の何倍かを支払つて女性を自分の妻とすることができる。しかしこの問題は当事者間で解決されてしまい、その為の争いも社会的な問題にまでは発展しないようである。従つて警官 (policeman) の役目はもつぱら部落の共同作業である草刈りや、さく作りなどをさほる者をつかまえてきて、罰として一日から数週間部落の草刈りをやらせることである。常習者はやはり次第に期間が長くなるのである。彼等の政治組織における罰則はこれが唯一のものである。従つて犯人もとらえられても抵抗しないし、 police men も暴力をふるうわけではない。witch doctor は病人の病気の原因がわからぬ場合に特殊な歌を唄いおどりを踊つて evil spirit を呼びだし、その原因と治療法をききだすことができると思はれてゐる。drink fest は収穫が全部終つたときにあるだけだがこの際も村中で support してちょうどピクニックのようにかつ



てきままに座り、楽しむわけでこうした祭りにもBarrio CaptainやWitch doctorなどの身分上の上下は表われていない。政治的な力、宗教的な力がまだ社会の構造上に充分反映しておらずBarrio meetingにおいてはBarrio Captainが、また病気に関してはwitch doctorがと、それぞれ持場は決っているが、土地所有の形態も地上権、耕作権であり、いわゆるLandowner的な性質を持つ階層も発生していないことから、経済的ないし、宗教的な意味での階級、階層の分化はほとんど進んでいないと考えられる。彼等の協働の基盤として、性にもとづく自然的分業は、例えば男性が狩猟や、焼畑作りの際のCutting, Burning等、女性が料理や刈入れというふうにできあがっているが、社会的分業の段階にはまだ到達していない。

#### (C) 通過儀礼

子供の出産に関しては、例えば産室などの特別な準備及びそれに関連した信仰、儀式等は全く確認できなかった。年令に応じた神や年令に応じた儀式もないようである。子供の命名は生れた場所や状況に応じてなされる。カトリックの場合名付親がありたいていその親のクリスチャンネームを受けつぐ、従つてこの場合名前は二字になるがそうでない者は一字である。

〔結婚〕彼等は男性で15～16才女性で12～13才で結婚する。プロポーズは男性が女性におくりものをするこゝとでなされる。それを受取ると承だくの意味を表わすのである。この場合男性は結婚したいと希望する女性の両親に会い solgidus という両家族のmeetingを持つ。結婚の資格は金を払えるかどうかにかかっている。普通男性は女性の家に25～30<sup>ペソ</sup>（2千円から3千円）支払う。又、アルマシガという木のヤニを取るためのぼりの上手へたも問題となる。又陶製のお皿20枚位で代用することもある。結婚式のようなものは一切ない。両家族のミーティング

が結婚式代りであろう。男性が希望して両親の許可を得ると、女性の意志に反しても結婚しなくてはならない。多くの場合、夫婦は新しく家を建てて住む、これには部落中で援助して家を建ててやる。焼畑も新しく与えられるわけである。

〔離婚〕離婚の原因はさまざまであるが社会的な規制がないため非常にしばしばくりがえされている。ここにその典型的な例をひとつひこう。タマンの息子であるメジョールは6年前アンパンを前夫から盗んだ、これは<sup>ペソ</sup>20で話が決まり、新しい夫婦ができたわけである。メジョールは現在26才アンパンは24才である。

二人の間にはアルマンドという一人の息子ができた。ところがティンバイが数年か前から秘かにアンパンに贈り物をし、彼女がそれを受取つたのでティンバイはメジョールに<sup>ペソ</sup>60を支払い彼女と結婚した。息子は彼女の希望により彼女が引取つた、これは血縁が母方によつてしか本当にはたどり得ないことに起因していると思われる。メジョールはしかたなくギタラと呼ぶ楽器を友人と二人で合そうしながら山の中をあちこちの部落をラブハントして歩き我々がリブソ部落に滞在中、その部落で10才の女性を獲得し、刈り入れが終ると結婚するという約束をして自分の村へかえつていつた。このようにむしろ雑婚とも思えるほどしばしば結婚の相手が変わっている。女性は離婚するたびにその値段が高くなり従つて何度も結婚している女性ほど人気があり、かつまた高い評価を得ているわけである。こうしたことから女性はかなり自由なだけでなく高い尊敬を払われる地位しめている理由もうなづけるのである。

〔葬式〕夫婦の内妻が死んだ場合、その日か次の日に夫は布をかぶせられ、目かくしされて、墓となる森や、山の中につれてゆかれる。一定の墓地のようなものはない。森の中に穴をほり妻の死体を一緒に行つた者

が木の船型にくりぬいたものや竹のかごに置いて安置する。そして彼等は夫を放置したままにげだす。夫は目かくしを取り、妻に別れをつける。

1、2時間するとにげた者の内、独身者だけが帰ってきて、土をかぶせて木をやぐらのようにまわりに囲つて組む、動物に堀りかえされたりしない為の用心であろう。この木はさしておくとも根がついて枝を伸しいつのか森の他の部分と変わらなくなってしまうのである。そして部落にもどるのであるが部落につくまでは妻帯者はこの夫に姿を見せない。なぜならこの夫に姿をみられるとその見られた者の妻も又死んでしまうと彼等は信じているわけである。

部落に帰つた夫は直ちに新しい家に住み変え妻の死霊が帰ってくるのを恐れているのである。新しい家に住んでも夫は1~2週間は川に行くことができない。1~2週間後川に行くことができるようになるがさらに4~5週間すぎるまでは川を渡ることができない。それ以後は普段と同様に生活するようになるのである。夫婦の内夫が死んだ場合今度は女性がその役を行うわけである。子供が死んだ場合はこうした儀式はない。両親が死んだ場合、子供が結婚するまで場所を変えて近くの親せきと共に住むわけである。彼等は死者の魂を恐れるが死者を崇拜したり、死者との Ritual Relations等は持たないようである。

#### (D) 宗教及び信仰

神はないが死んだ者の霊や森や岩の精霊に対する信仰はある。Evil Spirit はバリタナンという木の精、ブララカオという岩の精、これは長い髪の女性であり、夜、鳥のようにとびまわり、星のようにきらりと光るといわれる。

バリタナンは病気の霊であり地域によつて、バリングーベンガヌン、デアロンガネン、ダラーダラの別名で呼ばれることもある。原因のわからない病気の時、witch doctor <sup>ない</sup>ディワタという種類の歌をうたい、皆が踊りをおどると病人がどんな病気で、いかにしたらなおせるかとい<sup>う</sup>ことを知らせ

てくれると信じている。(音楽・病気をなおす歌の項参照)

またパニアエーンというのは悪霊の住んでいる大きな木、岩、草等がある場所であり、彼らは近よると死ぬと恐れて近よらない。ピナゴナンというのは死人の靈魂であり、その中でもシヨントというのは夜間、狩の時、その呼び声をきくと途中でも、やめて逃げかえつてしまうほど、恐れている靈魂である。

以上四種の靈魂を聞くことができたが、それらを祠るような行事や drink fest もない。誰か病気になつた時はその部落の witch doctor がその中心的役割を果す。焼畑耕作をしているが農業に関する神ないし靈魂の存在は確認できなかつた。また年令に応じた神、靈魂、年令に応じた儀式も確認できなかつた。キリスト教徒となつている一部のものの間では死者の崇拜があるが、大部分のものは死者を恐れても崇拜はしないようであつた。死者との靈的関連もない。彼らの間での身分の上下関係は、witch doctors のことを別にすると、宗教的な事柄にはよらない。

## (2) 音 楽

今回の調査では、音楽といつても、純音楽的な面より、歌詞の内容や、音楽に関係ある風俗習慣に、重点をおいた。調査したのは四バタク部落で、テープレコーダーによる録音と、録音曲に関する聞き込み調査を行った。これらの四部落は、いずれも似た環境にあり、また各部落間の交流もさかんなので、四部落における採録曲は、ほとんど同じだった。採録曲のうち確実にバタク族ものとみられるものは、ほんの一部で、それも最近作られたものであり、大半は彼らと多く交流する タグバヌア族をとおして流入したとみられる他民族の音楽である。

バタク族は、病気をなおす歌（ディワタ）を自分達の固有のものだと主張する。これはあるいは本当かもしれない。しかし、客観的にみると、やはり疑問がある。その根拠はこのディワタという言葉が、もともとタグバヌア族の神の名であるということと、スムロッド部落最長老のアワが、「バタク族とタグバヌア族とは同じメロディーで歌っていた」と言つたことの二つの点にある。これだけでは判断出来ないが、ディワタがバタク娘固有のものである

それから歌は、主として男性がうたい、女性はうたつても、せいぜいバックコーラスだけであつた。また男性の中でも若いものは、よく歌をうたうようだ。これは独身女性が男性に比べると、かなり少ないという特殊な社会だからかもしれない。

今回採録したものを分類すると、次のようになる。

### <曲の内容による分類>

- 病気を直す歌…………… 11 曲
- 感情をあらわしたもの…………… 17 曲
- （恋愛に関したもの）……………
- 子 守 歌…………… 1 曲



○雨ごいの歌…………… 1 曲

○踊りの伴奏…………… 1 曲

<演奏形態による分類>

○歌…………… 1 2 曲

○歌と演奏…………… 1 1 曲

○演奏…………… 1 4 曲

<使用言語による分類（歌のみ）>

○バタク語…………… 1 5 曲

○タグバヌア語…………… 7 曲

○コヨノ語…………… 1 曲

採録した曲は 37 曲であるが、同じ曲を別人が演奏したもので、種類は 31 種類である。

個々の曲について

- ① 曲名（曲名の意味） ② 録部落名 ③ 演唱者（年令） ④ 演奏形態  
⑤ 歌の場合の言語 ⑥ 楽器 ⑦ 歌の内容 ⑧ その他

<病気をなおす歌>

- ① ピアリブーダン（不明） ② スムロッド ③ アワ（55）部落の  
witch doctor ④ 独唱 ⑤ バタク語

- ⑥ 歌の内容 病気の原因である悪霊に、病人をなおす為 witch doctor  
（この場合アワのところへ来て、病名を話してくれと呼びかけている

- ①ピアリブーダン ②カラクアサン ③プトン (25) フェリックス  
(23) コンセプション (38 女) アキラ (15) (女) ④合唱  
⑤バタク語 ⑦同 上

- ①スキラン ( ) ②スムロッド ③ティンバイ (22)  
④演奏と独唱 ⑤バタク語 ⑥ギター ⑦同 上

- ①スキラン ②スムロッド ③ティンバイと彼の妻アンパン (26)  
④演奏と合唱 ⑤バタク語 ⑥ギター ⑦同上

- ①スキラン ②タグナヤ ③キリト (19) . リカヤン (19)  
アディリン (18) (女) ④合唱 ⑤バタク語 ⑦同上

- ①ダラーダラ (病気の霊の名) ②タグナヤ ③キリト、リカヤン  
アディリン ④合唱 ⑤バタク語 ⑦同上

- マヨ (良い歌) ②スムロッド ③ティンバイ、アンパン、エミリアー 1  
(26 女) ④合唱 ⑤バタク語 ⑦同上  
⑧この曲はランゴガンで流行したそう

- ①ディアロンガネン (病気の原因である霊の名前) ②リプン  
③メジョール (26) ポニトゥン (17) ④合唱 ⑤バタク語  
⑦同 上

① バクンタイル (不明) ② カラクアサン ③ プトン (25) フェリックス (23) コンセプション (38 女) アキラ (15 女)  
合唱 バタク語 内容はピアリブータンと同じ

① タムアス (more) ② スムロッド ③ アワ ④ 独唱 ⑤ バタク語  
⑦ 原因のわかっている病気 (例マラリア) をなおす ⑧ 歌詞はスムロッドで作られた

<感情をあらわしたもの (主として恋愛に関するもの)>

① リストロマン (ギタラの調弦と演奏) ② スムロッド ③ ティンバイ  
④ 独奏 ⑥ ギタラ ⑧ 何曲か弾くとき、最初に弾く曲

① キリアタン (胃痛に効く苦い味のつる草) ② スムロッド  
③ ティンバイ ④ 独奏 ⑥ ギタラ

① ババダクーバダク (施律) ② スムロッド ③ ティンバイ ④ 独奏  
⑥ ギタラ ⑧ 誇りを持つて歌う歌

① ディダヨ (歌) ② カラクアサン ③ オドイ (40) カラクアサンの  
(バリオキャブテン) プトン (25) ④ 演奏と合唱 ⑤ タグバヌア語  
⑥ ギンバル ⑦ かれらの愛する少女をとりあう、二人の男が、互に彼女  
を愛する理由を述べあう ⑧ この歌はスムロッド、リブソ、カラクアサンの  
三部落で録音できた、流行しているらしい

① ダラブン (歌) ② リブソ ③ メジヨール (26)、ポニトゥン (17  
(17) ④ 合唱 ⑤ バタク語 ⑦ 男は病気である、しかし彼は少女に  
恋している、そして彼は、もし少女が彼の愛にこたえてくれるなら、ど

んなに高価でも彼女に sewing machine を買つてやろうと考える。

⑧メロディーはダグバヌア族から、歌詞はバタク語で作詞者はオドイ

①ブンティアル（ギター独奏） ②リプソ ③ワニト（32） ④独奏  
⑥ギター ⑧ワニト自身の作曲で四ヶ月前に作った。

①コンポーソ（不明） ②リプソ ③ワニト、メジ・ール ④合唱  
⑤コヨノ語

「あなたがマオヨンに行つてしまうと私は、さびしくなつてしまう。もし私が行くのならすぐに帰つてくるのだが」と彼の恋人に話す。

①イノガリ（古い曲） ②スムロッド ③バシーリオ（39）  
④独奏 ⑥ギター ⑧1900年頃からある曲だという。

①アヌングーアヌング（humning） ②スムロッド ③ティンバイ  
④演奏と独唱 ⑤バタク語 ⑥ギター ⑦私が河のほとりでバナナ栽培している時、五ヶ月間だけある男と暮らして別かれさせられた少女をみる。⑧9才の時に自分で作曲したという

①オイーマンーマン（言いあらそい） ②スムロッド ③ティンバイ  
④独唱 ⑤ダグバヌア語 ⑦彼は結婚したい少女がみつかったから彼女の両親と会合を持つ。ついでに、彼女の両親の住むタナバクまで一緒に行つてくれるようバリオキャブテンに頼む。

①ピナーダク（米の一種） ②スムロッド ③ティンバイ ④独唱  
⑤バタク語 ⑦女の子と冗談をいいあう ⑧メロディーは昔からあつた

が、歌詞は彼が作った。

<子守歌>

- ①リバング（やすらぎ） ②スムロッド ③フランシスカ（40）  
④独唱 ⑥歌といつても、ア－ア－というだけで、言葉がない。

<雨ごいの歌>

- ①バリングーベンガヌン（霊の名前） ②スムロッド ③アワ ④独唱  
⑤バタク語

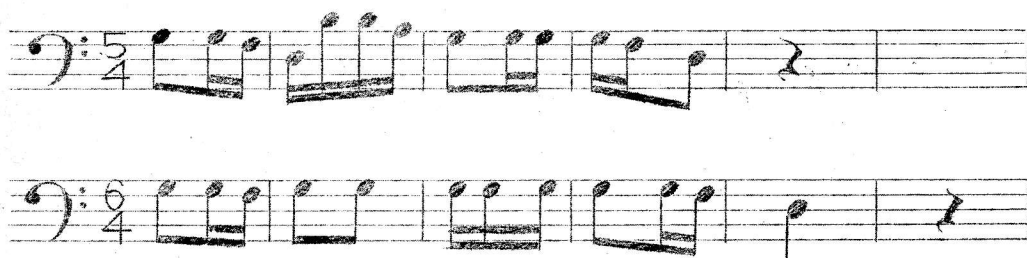
<踊りの伴奏>

- ①タルク（踊り） ②タグナヤ ③キリト（19） ④独奏  
⑥ギンバル ⑧病気をなおす時、皆で楽しむ時に演奏される。

譜例

① ピアリブーダン

アワ独唱



以上のメロディーを不規則に数回繰り返す。



② パクンタイル 男一ブトン 男二ファリックス 女一コンセプション

男一

男二

女一

譜例

③ ディ ダヨ

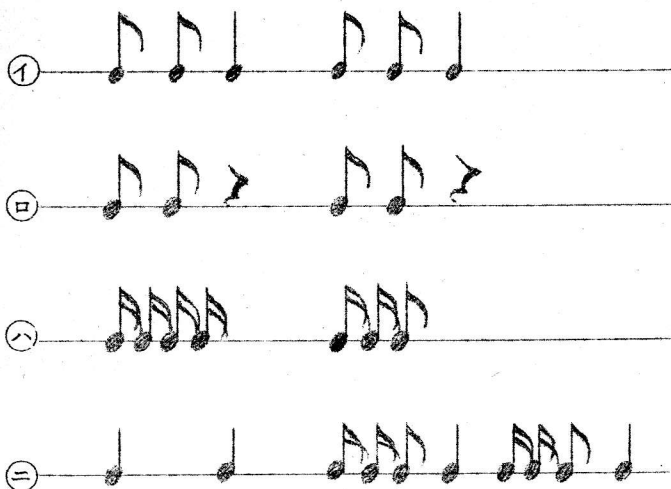
オドイ

ギンパル

以上を繰り返す（1と2の間は言葉の関係で長くなることもある）

④タルク

次の四リズムがあつた。



いずれもギンバル使用

病気を直す歌について

この地域には医療施設がなく、そのうえ生活は不衛生極まりないので、彼らには病気ケガが絶えない。これらの治療に関することが、生活上の大きな問題となるのは当然である。しかし、おもな治療法はいまだに witch doctor の歌と、それに合わせての踊りである。録音した曲の  $1/3$  がこの種の曲であるのも理解できる。

witch doctor の歌うのはその病気の原因がわからない時で、彼は霊を呼びだしその原因を聞き出す。この場合に歌われる歌を総称してディワタという。だからマラリヤのような、原因のわかっている病気の場合は、ディワタではない歌が歌われるわけである。

ディワタは曲の内容によつていくつかのグループにわけられている。そ

彼らは、曲名を呼ぶより、グループ名を呼ぶことの方が多いので、同じ名前で違つた曲という場合が時々ある。

	ディワタ		スキラン	}	ダラーダラ	
病気をなおす歌	霊に関係ある (原因不明の病気)		マ      ヨ		}	.....
			ピアリブーダン			}
			.....	.....		
		.....				
	霊に関係ない		.....タムアス			
	(原因がわかっている病気)		.....			

○ 踊り

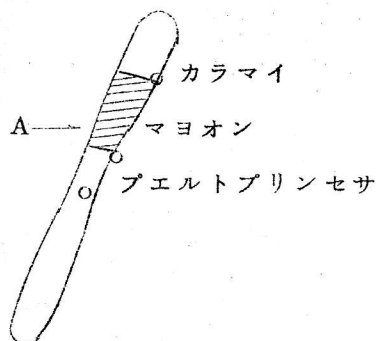
○風習

## ○ 地域

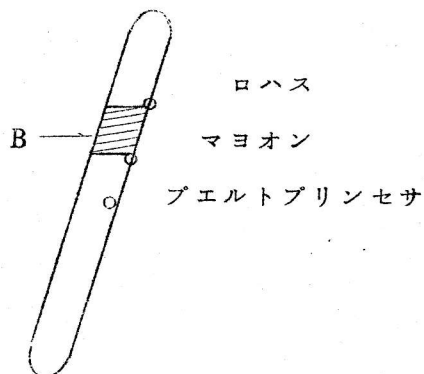
-60-

(斜線の範囲) - A

＊音楽



＊言語



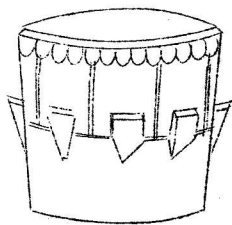
これは（バタク語・タグバヌア語が話される地域）とほとんど一致しているので、かなり正しいと思う。

《楽器》

○ギンバル (Gimbal)

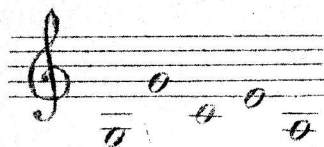
歌、演奏及び踊りの伴奏に使う打楽器。円筒形で片面にだけ獣皮（猿皮、トカゲ皮、山羊皮、蛇皮等）を張る。表皮の調節は可能である。手又はバチで奏でる。連絡用に使われることもある。製作法はタグバヌア族からきており、バタク族個有のものではない。

直径約 20 cm、高さ約 25 cm



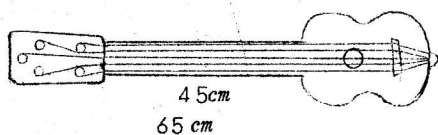
○ギタラ (Guitara)

バタク族が現在最も愛奏する撥弦楽器である。スペインのギターを模倣したと考えられる。五弦で調弦法は次のようにする。

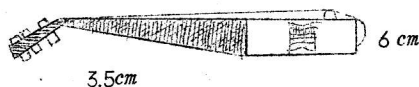


第一弦 第二弦 第三弦 第四弦 第五弦

これは、五弦の音高が相対的に左図のようになるということであり、この調弦法はギターや、ウクレレと似ている。弦はナイロンを使用しているが以前は、女性頭髪だつたという。昔から似たような弦楽器があつたというが、疑問である。



5  
4  
3  
2  
1  
弦の  
番号



### ○アゴン (Agong)

スムロッド部落のバリオキャブテンの家で見たが、家宝となっており演奏には使用しないとのことだつた。80年前にモロ族からきたもの。直径約50cm、高さ約30cmの壺状ゴング。

以上四点の他、今回見ることはできなかつたが、連絡用、収穫祭用の長さ約2mの節を抜いた竹筒の打楽器があるという。



## VIII パラワン島北東部にあるバタク部落におけるネズミ

第二次パラワン島探検に参加して、約20日間、パラワン島プエルトブリンシサの北方、約60 Kmの地点にある海岸線の部落と、1 Kmから3.3 Kmほど山へ入った所にある4つの部落、計5つの部落でネズミの採集を行つて来ました。目的は、山の中を、木の実や植物の根、動物を採集しながら放浪していたネグリト（現地ではバタックと呼ばれる）現在は焼畑農業に移行しつつあると言われていた。（実際現地へ行つてきて、焼畑で米を作っている事が解かった。）このような自然の中に孤立した部落で人間と関係のあるネズミを見つけ出し、その生態を調べる事にありました。そして16回、延べワナ数600ケのワナかけによつて4頭のネズミ(*Rattus rattus*の幼獣2頭と*Rattus luteiventris* subsp 2頭)を得ました。そして、この2種類のネズミは、家屋内には住まず、人間の作つた米を食べている事が分かりました。しかし毎日タタワナをかけてもネズミは取れず、個体数が少ない為にワナにかからないのか、エサかトラップが悪い為なのか解からないままに、20日間は過ぎ、巣や活動時間、他の事等に関してはほとんど解かりませんでした。

しかし、その時の採集の状況を報告します。標本の同定は京都大学の徳田御稔先生にお願いしました。又出発までに、岸田久先生、神奈川博物館建設準備委員会の小林峯先生に色々と御援助いただきました。他にも先輩、友達等色々な方に御援助いただきました。ここで厚くお礼申し上げます。

### (2) 採集地点

州都、プエルトブリンシサから60 Km北の海岸線にあるサンラファエロ村（タグバヌア人が住み我々のベースキャンプを置いた村）さらにこの村から6 Km北にあるタラバナ川とサンラファエロ村の南にあるババン

川との間に、海岸線に平行して、1 Km から 3.3 Km 山へ入った所に 4 つの部落、タグナヤ、カラクアサン、スムロッド、リブソ（バタク人が住む）があります。この 5 つの部落で採集を行いました。バラワン島は熱帯雨林地帯に入り、時に南部と西海岸に発達しております。私達の歩いた、この 5 つの部落附近でも、海岸線にわずかと、人間の手の入った所（焼畑等）と川原以外は全て 20 ~ 30 m の大木におおわれた森林でした。クレオパトラニードル山登山が中止になった為、この 5 つの部落内とその附近で採集を行ない、人間の手の全く入らない所では採集を行ないませんでした。

### (3) 調査方法

ステージを家屋内、部落内又その附近のヤブ、焼畑、森林と分けて採集を行ない、活動時間については二度、昼間のワナかけ、巣に関しては観察を行なう事にとどまりました。ワナは、小形のバチンコ式を使い、エサは小麦粉にピーナツとコンビーフをまぜて、ねつたものを使用しました。ワナのかけ方は、方形又は帯状というように計画的には行なわず、森林内では木の根本、焼畑内では、イネ、トウモロコシの根本を中心にかけました。

### (4) 採集結果

	ス テ ー ジ	回 数	ワナ数	R・r	R・ℓ
サンラフエロ	家 屋 内	3	23	0	0
	部落附近のヤブ	1	8	0	0
	焼 畑	1	35	0	0
バタクの部落	家 屋 内	0	0	0	0
	部落附近のヤブ	4	105	0	0
	竹 ヤ ブ	1	5	0	0
	焼 畑	11	355	2	2
	森 林	2	40	0	0
計		23	571	2	2

4頭のうち *Rattus luteiventris* subsp. 2頭はスムロッド部落の焼畑内で *rattus* の幼獣2頭は、リブソ部落の焼畑内で得た。それぞれ雄雌1頭ずつで、*R. luteiventris* subsp. の雌は乳腺が発達しており皮をはくと白い乳が出た。又子宮には左5、右4の4mm位の楕円形の玉がついていた。雄は精巣が発達しており、外側から見ても尾の下に大きく飛び出していた。ベースキャンプで乾燥させて持ち返えるつもりでほしてあつた。胴体は、不注意から犬に食われてしまい頭骨がなくなつてしまつたが、皮、測定値等から徳田御稔先生に *L. luteiventris* subsp. と同定していただいた。 *R. rattus* の幼獣2頭はアリにかじられ皮がボロボロになつていた為乳頭は解からなかつたが乳腺は発達していなかつた。

かけたワナのうち70%位はアリの他に大きなコオロギにエサを取られる事が多かつた。他にもカエル、カニ、小鳥がかかつた事があつた。ワナがはずれている事もほとんどなかつたが、サンラファエロ村で小学校の物置きにかけたワナの一つには、はつきりと歯の跡がついていた。次に測定値を記しておく。

	種 名	頭胴長	尾長	耳長	後足長	前足長	乳頭式	体重
No 16	<i>R.l.subsp</i>	139.0	144.8	17.8	24.3	12.31		58g ♂
No 17	<i>R.l.subsp</i>	137.3	142.7	17.1	23.5	10.8	2+0+2=8	74g ♀
No 18	<i>R.rattus</i>	73.6	84.7	—	19.4	—		16g ♂
No 19	<i>R.rattus</i>	84.6	108.3	—	20.6	10.1	—	17g ♀

#### (4) 活動時間

スムロッド部落の *R.l.subsp.* の取れたと同じ焼畑内で一度（ワナ数20）とリブソ部落の焼畑内で一度（ワナ数30）の計二度、昼間、採集を行なつたが、かからなかつた。これだけからは何も解からないが、現地の人間に聞くと、時々昼間も見ることがあるらしい。

## (4) 食 性

植物の名前も解からず、又、部落の附近に生活しているとしても、巢の場所や、活動範囲が解からない為、食性全般については解からないが、米を食べている事だけは確かである。4頭の胃内容物を調べてみると、*R. l. subsp. ♀*のは、米のデンプンがほとんど全てで、モミ穀が少量と昆虫の羽、足が少量、ウジ虫が一匹入っていた。

このウジ虫は、長さ10 mmほどあり内容物は、すっかりなくなつて皮と頭だけになつて縮んでいたが、一匹まるのままである。ネズミはすりつぶすようにして食べるから、このウジ虫は、食べたものか、それとも寄生虫かよく解からない、*R. l. subsp.*の♂には、全て米のデンプンのみであつた。*R. rattus*の胃内には、♂の方は、米のデンプンがほとんどで、黒い土のようなものが少量と植物の根の切れはしが少個入つていた。♂の方は、米のデンプンがほとんどで、モミガラが少量と植物の根が数個、それに、白い石のカケラのような長さ3~4 mmほどの個形物が5個位入つていた。このように4頭とも、米が大部分であるが、一年間のうち数ヶ月は米のない時期がある。バタタ人は、貯蔵する事をしないから全く米はなくなる。その間は、他の物を食べるわけで、米を食べる事は確かであるが、どの程度、米に依存しているかは解からない。タグナヤの部落で、トウモロコシが食べられると聞き、米の中にまばらにはえているトウモロコシをみたが、確かに、大きく、ひきさかれたように、穴があき、内の実が食べられている。しかし、畑には、サルやリスも出て来ていたから、ネズミが食べたのかどうかは解からない。

## (5) 巢

巢は一個も見つからなかつたから、はつきりした事は何も解からない。ただ、家屋の形態からして家の中には、巢を作つていないようである。サンラファエロ村の小学校を除いて全て高床式で、4本の柱と床と屋根(パンガというヤシに似た植物の葉でふいてある。)だけの簡単なもの



から、壁があり、室もいくつかにしきられたものまであつた。サンラフェロ村の家はもう少し複雑である。しかし、どの家においても、ネズミが巣を作るような物かけや天井裏等なく、又、竹を使つてゐるのは、床だけで、それも半分に割つてしいてある。だから竹の中に巣を作るという事もない。そして家の中には、人間が犬や時にはネコといつしよにひしめいている。現地の人間に聞いても、夜米を食べに入つて来る、そして、タグナヤとカラファサンではネコが居るからネズミは入つて来ないとの事であつた。ネコは、タグナヤとリブソで見た。

(5) 聞きこみ調査によるもの

ほとんどが、案内人のベン（タグバヌア人）から直接又はベンを通してバタク人から聞いたものである。タグナヤ部落へ行つた時、ベンにネズミを見た事があるかどうかと聞くと、ある、そして、大きいのと小さいのと、その中間のと、3種類いる。夜米を食べに家へ入つてくる。バタク部落でもサンラフェロ村（彼はこの村に住んでいる。）でも同じネズミだ。しかし、タグナヤでは、ネコがいるから家にはいない。と話してくれた。さらにバタクに聞いてくれたが、それは前に書いたようにトウモロコシを食べるという事であつた。その後、リブソ部落へ行つた時に同じ事をベンに再度聞くと紙に種類を書いてくれた。バタク語でネズミをブンゴと言い、大きな種類を *anrabing* 小さな種類を *mango-gua* , 中間に対しては、しばらく考えていたが何も書かなかつた。そして、採集した4頭のうちの *R.l. subsp.* の方が *aurabing* で *R. rattus* の方が *mango-gue* だと言う。*R. rattus* は幼獣だから成長すれば大きくなるし、採集は出来なかつたがはつかネズミの類もいる可能性は十分ある。だから話しを全て信用するわけには、いかないが、2種類から3種類米を食べ、人家にも入つてくるネズミがいるようである。サンラフェロ村でネズミが出るからワナを借してくれと言われ借したが取れなかつたし、自分でもネズミの出ると言う室にかけてみたがとれなかつた。バタクの焼畑は雑草もひどくまじつて



おり、どの位動物に食われたか等の数量が解からないからかも知れないが、とにかく、ネズミにやられて、食料（主食は米である。）危機になつたという話しは一度も聞かなかつた。

(6) 各部落での採集情況

(イ) サンラファエロ村

海岸線にあり、昔スムロッド部落のバタク人がこのあたりに住んでいたと思われる。いつ頃か解からないが、タグバヌア人が来て今のサンラファエロ村を作つた。プエルトプリンシサより1日に2度バスがかよっており、途中、同じような村や焼畑が続いている。家のまわりはバナナ、パイナップル、ヤシ林があり所々竹ヤブとなつてゐる。少し山へ入つた所にいくつか焼畑がありその後は、すぐに森林である。ニワトリがたくさん放し飼ひになつており、ワナをかけづらかつた。小学校の物置き、机やイスがつみかさなつてゐる下と、ネズミが出るという家の中、まわりのヤブ、少しはなれた焼畑にかけてみたが、物置の1つのエサに歯の跡があつた他は、反応なかつた。

(ロ) タグナヤ部落

タラバナン川口そつて3.3 Km奥の急な谷の斜面と沢ぞいの小さな平地にある。タラバナンから部落までの途中は森林で人家はないが所々小さな畑があつた。沢ぞいの小さな平地に小屋が6~7戸建つており又、所々野生のトマト（親指の頭位の大きさの実がなつてゐた。）やペッパーをまじえたヤブとなつてゐた。その外側はすぐ森林である。この平地から5分ほど登つた斜面に50m四方位の焼畑があり一軒の小屋が建つてゐた。焼畑内には米の中にサトウキビやトウモロコシが少しまざつてゐた。この焼畑内とすぐ横の竹ヤブと下の沢ぞいのヤブに3回ワナをかけたが、全々反応なかつた。

(ハ) スムロッド部落

サンラファエロ村からすぐ1 Kmほど山へ入つた所にある。タグナヤよりさらに急な斜面にあり、尾根上に3戸の小屋と下の沢ぞいに2戸の小

屋がある。下の小屋には人は住んでおらず、又、離れた所にも焼畑があつて部落のほとんどの人間はそちらへ行つてゐるらしかつた。この尾根上の三戸の小屋のまわりに小さな焼畑が広がつていて、すぐ森林と接している。昼間もいれて3回ワナかけを行い、2頭(R.1・subsp)を得た。1頭は小屋から5m位の焼畑の中であり他の1頭は焼畑のはずれの森林に接する所で得た。他はワナのはずれているのが数ヶあつたのみで反応はなく、やはりほとんどのエサはアリにやられていた。

(三) リブソ部落

バブヤン川にそつて1時間半ほど奥にあり戸数も多く家屋も他の部落に比べ複雑で一番開けた部落だつた。部落内と、川むこうの山の斜面にある焼畑と、部落の後にある森林内(焼畑の跡に出来た陽樹林に接した20~30mの大木の森林)に昼間1回いれて5回ワナかけを行つた。焼畑にある雨やどり小屋のわきで1頭とそこから50mほど離れた雨やどり小屋のすぐ下のイネの間で1頭と計2頭のR. rattusを得た。森林内は薄暗く落葉がしかれており、所々小さな竹や、トゲのある木性シダの類、とラタンのツルがからみあつている他ほとんど下草はない。焼畑に位ベアりに食べられるのが減るかわりに、コオログがよくかかつており他にもカニ、カエル、小鳥が一匹づつかかつた。1ヶ、ワナがはずれていた他反応はなかつた。

(四) カラクアサン部落

他の部落と同じく、タナバック川にそつて海岸より3kmほど入つた所にある。ここでは焼畑でワナかけする許可が得られず、沢ぞいのヤブに1回のみ採集を行なつたが反応なかつた。

参考文献

- (1) N.Hollister                      A list of the Mammals of  
the Philippinean  
The Philippine Journal of Science  
Vol7,2,1912,no2
- (2) E.H.Tyler                      (1926)                      Philippine Land Mammals
- (3) 徳田御稔                      (1941)                      "日本生物地理"
- (4) 細川隆英                      (1943)                      "南方熱帯の植物概観"

# 文献目録

- 棚瀬襄爾 比律賓の民族
- A.L. Kober People of the Philippines (1919)
- 三品彰英 フィリッピン民族史
- 三好朋十 比律賓の宗教と文化
- 三好朋十 比律賓の土俗
- 世界地理文俗大系, 9, 東南アジア諸島、太平洋諸島
- 別枝等彦 東南アジア諸島の居住と開発史
- 平野義太郎 フィリッピンの自然と民族
- 清野謙次 太平洋民族名学
- 帝口学士院 東亜民族名異
- 仲原善徳 比律賓紀行
- 沖 資雄 比律賓タガログ語会話
- 外務省調査室編 比律賓民族史
- 泉井久之助 世界言語概説。マライ。ポリネシア諸語
- 三好朋十 比律賓民族誌
- G.F. Zeia Philippine Political and Cultural History VOL 1 (1957)
- T. Forman The Philippine Islands
- D.P. パウロス フィリッピン
- 宇野円空 東南アジアの民族的宗教
- ロベルトラッハマン 東洋の音楽
- エリス 諸民族の音楽
- 中尾佐助 栽培植物と農耕の起源  
耕

1 : 500,000

